

香南市まちづくりグランドデザイン基本計画

平成 28 年 3 月

香南市

目 次

【第一部 本編】

第1章 基本計画の位置づけ

- 1 香南市まちづくりグランドデザイン
- 2 基本計画の内容
- 3 分野別基本計画について

第2章 将来人口フレーム

- 1 人口の現状
- 2 香南市の将来人口フレーム

第3章 分野別基本計画

- 1 公園緑地景観環境形成基本計画
- 2 水資源等活用保全基本計画
- 3 交通網体系基本計画
- 4 観光ルート拠点形成基本計画

第4章 土地利用基本計画

- 1 沿岸地域のまちづくり
- 2 市街地ゾーンのまちづくり
- 3 自然環境山林ゾーンのまちづくり
- 4 農業ゾーンのまちづくり
- 5 地区別土地利用計画

第5章 実現に向けた検討事項

- 1 香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略への検討事項

第1章 基本計画の位置づけ

1 香南市まちづくりグランドデザイン

(1) 計画の全体構成

香南市まちづくりグランドデザインは、香南市振興計画で示された「美しい水と緑に包まれた、元気で豊かに光るまち」の実現を目指し、市民と行政が協働で香南市の将来像について検討し、本市が今後取り組むべき施策の整備方針を反映させ、将来の香南市の都市像を描き、まちづくりに関する様々な分野での方針および取り組みの方向性を示すものです。

香南市が地方都市として持続的に発展し続けるためには、それぞれの地域が持つ地域資源を活かしたまちづくりをこれまで以上に進めていくことが必要です。そのため第一のステップとして、平成25年度にゾーン別土地利用方針を検討し「香南市まちづくり構想」を取りまとめてきました。

また、将来のまちづくりの姿を具体的に把握するため、第二のステップとして香南市の将来の人口フレームを検討することとしました。

そして、第三ステップとして、香南市まちづくり構想と将来人口フレームをもとに、分野別まちづくり施策の基本計画を検討し、それをもとにした土地利用基本計画を策定することとしました。

以上の、「香南市まちづくり構想」、「香南市将来人口フレーム」、「香南市分野別基本計画」、「香南市土地利用基本計画」により、香南市全体のまちづくり方針を総合的・体系的に示す香南市まちづくりグランドデザインを完成させることとしました。

- ①香南市まちづくり構想（平成25年度）
- ②香南市将来人口フレーム（平成26年度）
- ③香南市分野別基本計画（平成27年度）
- ④香南市土地利用基本計画（平成27年度）

(2) これまでの経緯

平成25年度に、持続可能で元気な香南市の創出を目指し、香南市のまちづくりの方向を検討してきました。その内容は、次に示すとおりです。

①香南市まちづくり構想

香南市の目指すべきまちづくり方向をゾーン別に検討し、将来土地利用構想および将来土地利用方針図として取りまとめた。

②沿岸地域のまちづくり

地震津波災害が予想される香南市の沿岸地域のまちづくり方策について、高台移転の可能性を踏まえたまちづくりイメージとして取りまとめ、整備手法の可能性の検討を行った。

③香南市産業振興計画

香南市の産業振興を実現するために必要な施策、分野別成長戦略と地域活性化策から検討し、7年間の間に実践する具体的な施策を取りまとめた。

④新庁舎周辺土地利用計画

新庁舎建設用地の検討に基づき、新庁舎周辺地区の土地利用計画を策定した。

（３）目標年次

平成 26 年 12 月に人口減少問題を背景に、「まち・ひと・しごと創生法」が施行され、「長期ビジョン」と「総合戦略」が施行されました。2060 年を視野に人口減少問題の克服と成長力の確保をめざして、長期ビジョンを策定し、総合戦略において取り組みを行うことが求められ、香南市においても、人口の現状および長期的な将来の見通しを示す「香南市人口ビジョン」を策定し、これを踏まえ、香南市の実情に応じた今後 5 ヶ年の目標や施策の方針、具体的な施策を「香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略」としてとりまとめを行いました。

「香南市まちづくりグランドデザイン」は、概ね 20 年後の将来の香南市の都市像を描き、平成 25 年度から策定を行っていましたが、本グランドデザインは、「香南市人口ビジョン」「香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の核となるものであるため、その目指す将来像を 20 年後から概ね 45 年（2060 年）に見直して策定することとします。

２ 基本計画の内容

まちづくりグランドデザイン基本計画は、平成 25 年度に検討された**香南市まちづくり構想（平成 25 年度策定）**をもとに、まちづくりの具体的な目標となり得る人口フレームの検討と、分野別基本計画並びに土地利用計画の検討を行ってきたものです。

したがって、まちづくりグランドデザイン基本計画は、以下のような項目により、取りまとめることとしました。

- （１）将来人口フレーム
- （２）分野別基本計画
- （３）土地利用基本計画

３ 分野別基本計画について

（１）基本的な役割

香南市まちづくりグランドデザインで示す将来像は、香南市行政だけではなく、市民、開発者、地域住民、移住者、地権者のまちづくりに係わるすべての関係者が、協働でまちづくりを行うための共通の目標とする街の姿を示すことを目指しています。

そのため、この基本計画は、関係者が連携し協力して現状の問題点や課題を解決するための方向性を見いだすための役割を担うとともに、今後、香南市行政や、市民、企業のみならずが行う新たなまちづくりに関連する各種事業において、より望ましい将来方向を関係者が共有し、より有効でより効果的で、経済的にも良好な開発効果や整備効果を享受することに資することを役割とするものとなります。

また、香南市の望むべき将来方向をわかりやすくするため、基本計画は、次に示す 4 つの分野に分けて検討することとしました。

- 【分野別基本計画】
- （１）公園緑地景観環境形成基本計画
 - （２）水資源等活用保全基本計画
 - （３）交通網体系基本計画
 - （４）観光ルート拠点形成基本計画

(2) 今後の課題

今後はまちづくりグランドデザインや分野別基本計画をもとに、各分野において官民が協力して具体的な整備方針や整備計画を検討する必要があります。

分野別計画の共通目標像	香南市が将来にわたって持続可能なまちを創生するためには、「香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略」もその一つですが、そのほか、都市基本計画、農業振興計画、森林保全整備計画、下水道計画、水とみどりの基本計画などに代表される各分野別マスタープランの作成や、中心市街地活性化や観光産業振興、あるいは、居住環境形成の考えなどの方針決定が必要となることが考えられる。 上記の計画の具体的な整備事業を検討するにあたっては、今後は、整備箇所や整備目標時期のほか、整備水準や整備手法について事業費などを考慮しながら整備計画を策定する必要がある。 香南市まちづくりグランドデザインおよび分野別基本計画は、直接的に公共施設の整備推進を示すものではありませんが、具体的な公共施設などの整備計画を策定する際の上位計画と位置づけるとともに、関連分野との連携の共通目標像としての役割を担うことになる。
協働の基本方針 分野の連携と	まちづくりに関する各種の事業計画や実施計画を進めるなかで、様々な課題や問題点が発生することが予想されますが、それらについて香南市全体のまちづくり方針や将来像を再度検証することにより、必要な方向見直しや新たな方針などを検討し、より有効で実現可能な事業計画を策定する役割を担うものとなる。 今後とも、社会環境の変化や生活環境の変化に柔軟に対応しつつ、本来の目的である香南市の公共施設の整備推進に寄与する香南市まちづくりグランドデザインおよび分野別基本計画であることが期待される。

第2章 将来人口フレーム

香南市グランドデザインの分野別基本計画を策定するにあたっては、将来の人口規模を十分に考慮する必要がありますが、その規模については、地域別(町別)によって大きく将来の推移方向が異なると考えられます。また、更に細かな地区についてもその傾向は異なっており検証が必要です。

香南市の将来人口推計においては、社会移動や出生率などの指標を考慮し、このままの状況が続く場合や2060年の目指すべき姿について展望を行います。また、香南市の総人口を推計するとともに地域別の将来推計人口の検証も行うこととします。

さらに、香南市の持続可能な都市構造を標榜するグランドデザインの策定においては、香南市の活性化施策を積極的に図る場合の人口規模を基本に考えるものとします。また、その施策の内容については、現在の状況が続くと仮定した場合と比較しながら必要な施策や検討した施策の効果などを検証します。

1 人口の現状

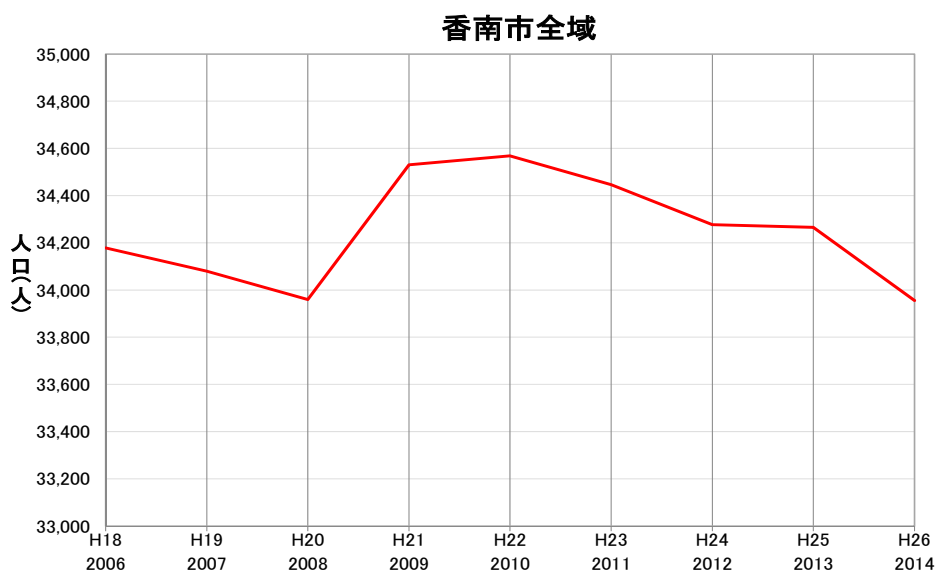
(1) 人口

香南市の人口は、平成26年3月末現在住民基本台帳によると、34,322人となっています。また、町別では、野市町、香我美町、吉川町、赤岡町、夜須町の人口はそれぞれ、19,211人、6,460人、1,830人、3,021人、3,800人ですが、合併直後の平成18年4月1日のそれぞれの町の人口は、17,930人、6,412人、2,072人、3,448人、4,317人でした。

この間の増減数を見てみると、野市町1,281人増、香我美町48人増、吉川町242人減、赤岡町427人減、夜須町517人減で、総人口に対する率はそれぞれ野市町3.73%増、香我美町0.14%増、吉川町0.71%減、赤岡町1.24%減、夜須町1.51%減となっています。

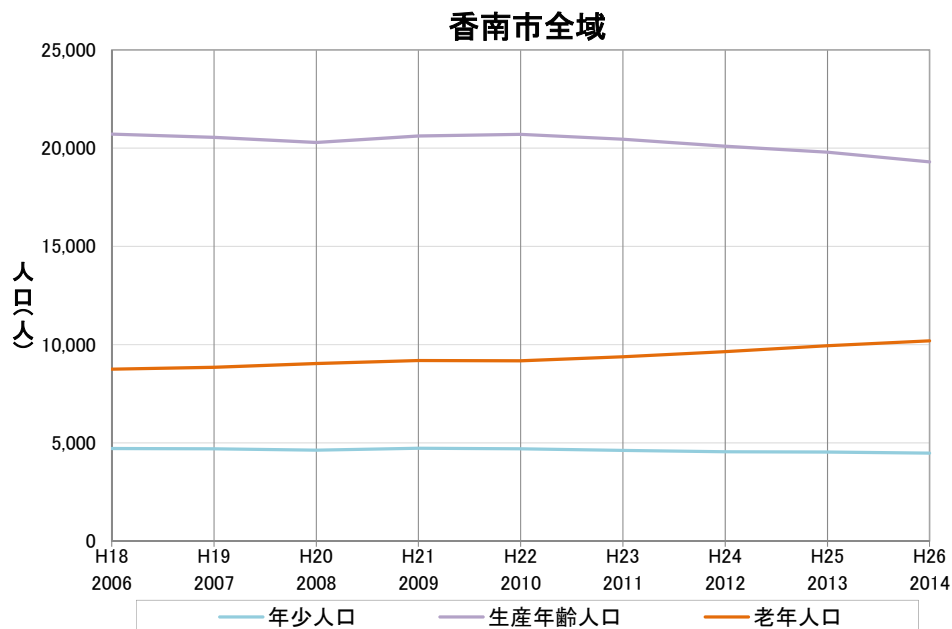
香南市は、高知県で唯一人口増の傾向を持ち続けてきた市ですが、近年増加傾向は鈍化し、今後は減少に転じるものと想定されます。

■香南市における総人口の推移



■香南市における年齢3区分別人口の推移

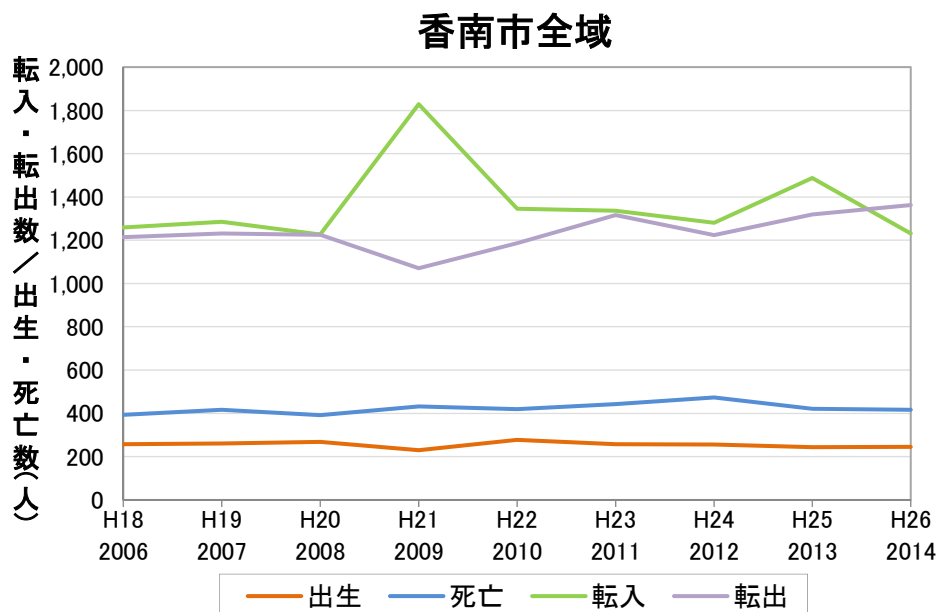
年齢3区分別人口の推移は、平成21年の自衛隊誘致に伴い生産年齢人口が増加に転じたものの、平成22年以降は減少傾向にあります。また、年少人口についても緩やかな減少傾向にあり、老年人口のみ、緩やかな増加傾向が見られます。



■香南市における人口動態の推移

香南市全域における人口移動の推移をみると、平成21年の自衛隊誘致のタイミングで転入者数が大幅に増えたものの、近年は転入・転出者数がほぼ同程度の傾向にあります。

一方、出生者数・死亡者数は、大きな変動は見られないものの、毎年死亡者数の方が上回っており、自然減が続いています。合併後の人口増減で見ると、平成21年の自衛隊誘致のタイミングを除くと減少傾向にあるといえます。



2 香南市の将来人口フレーム(目指すべき方向)

(1) 将来展望の基本的な考え方

香南市は、合併以降、転入超過の傾向が続き、市域の人口としては増加傾向が続いてきました。背景としては、高知市や南国市へのアクセス性が良く、自然環境に優れ都市部よりも安価に住宅を確保できる環境にあり、宅地開発が進み、高知市や南国市などから転入者が多く入ってきたと考えられます。しかし、土地のスペースには限りもあり、社会全体として人口が減少していくなかで、転入超過が未来永劫続くとは考えにくい点があります。

将来展望の基本的な考え方としては、転入者と転出者が均衡していくことを前提とし、今後活力ある香南市を維持していくために出生率の向上や移住・住宅開発による人口減少の抑制を図ることとします。

①社会移動

転入者は減少し、10 年後には転出者と転入者数が均衡していくが、移住促進、住宅開発、生涯活躍のまち（日本版 CCRC 構想）などの施策に取り組むことで転入者の減少を極力抑え、2025 年からは社会増約 120 人の状況が継続することを目指します。

②出生率

出生率は、高知県実施の結婚・出産・子育てに関する意向調査と、香南市が実施した結婚・出産・子育てに関する市民意向調査の結果が類似傾向にあることから、高知県が設定しているように合計特殊出生率が 2030 年に 1.84、2040 年に 2.07、2050 年に 2.27 まで段階的に上昇することを目指します。

③生存率

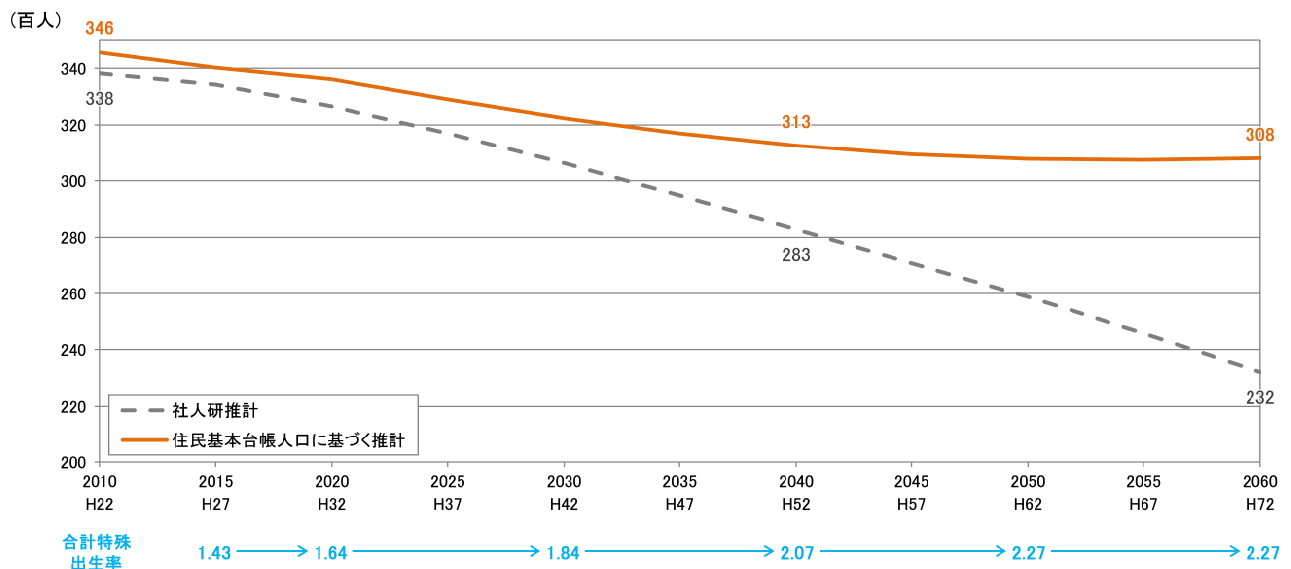
生存率については、現在と大きく変わらないと想定し、現在の傾向を維持することを目指します。

(2) 香南市の目指すべ方向

このままの転入出や死亡・出生の傾向が続けば、2060 年に香南市の総人口は 2 万 3200 人まで減少する見込みとなっています。このままでは、経済の低迷を誘発し、市民の生活水準が低下する恐れがあり、香南市の活力が維持できなくなる状況に陥ることが推測されます。

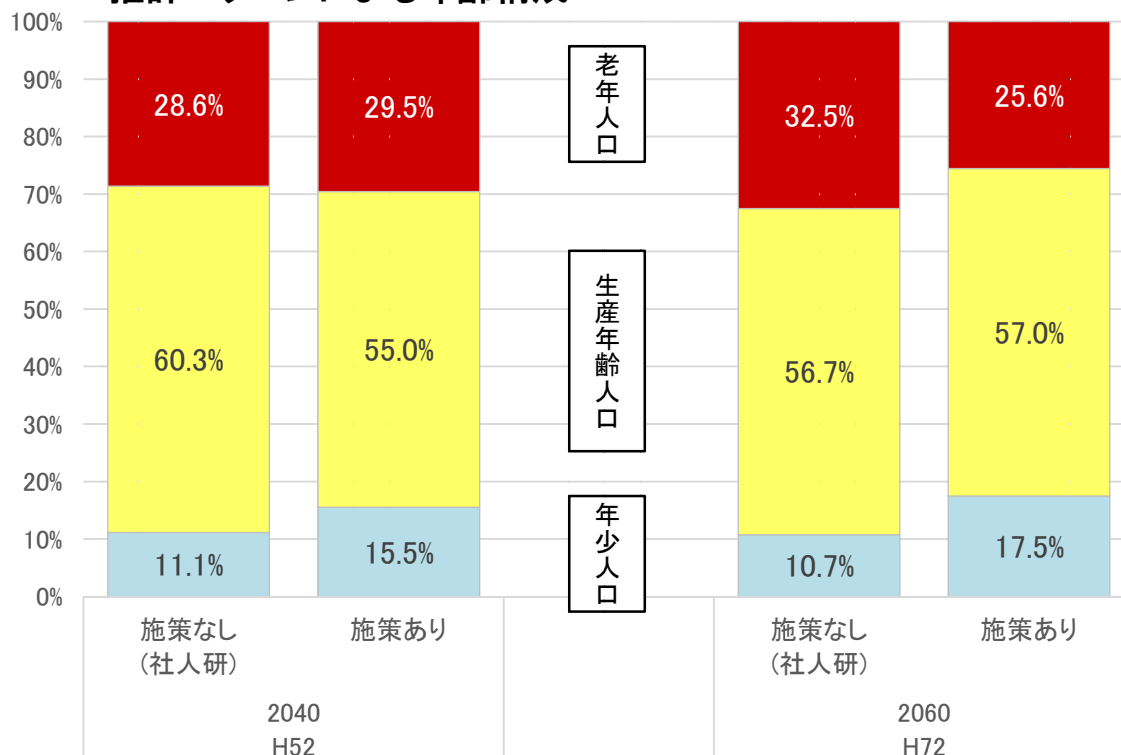
香南市としては、自然減の縮小や社会増に向けた一連の施策を講じることにより、2060 年の総人口の将来展望の見通しについて、約 3 万人の実現を目指します。この将来展望が実現すれば、2055 年で人口減少に歯止めがかかり、人口は増加に転じることとなり、香南市の活力維持、向上につながるることとなります。

■施策の効果による人口推計結果



出典) 国立社会保障・人口問題研究所、住民基本台帳

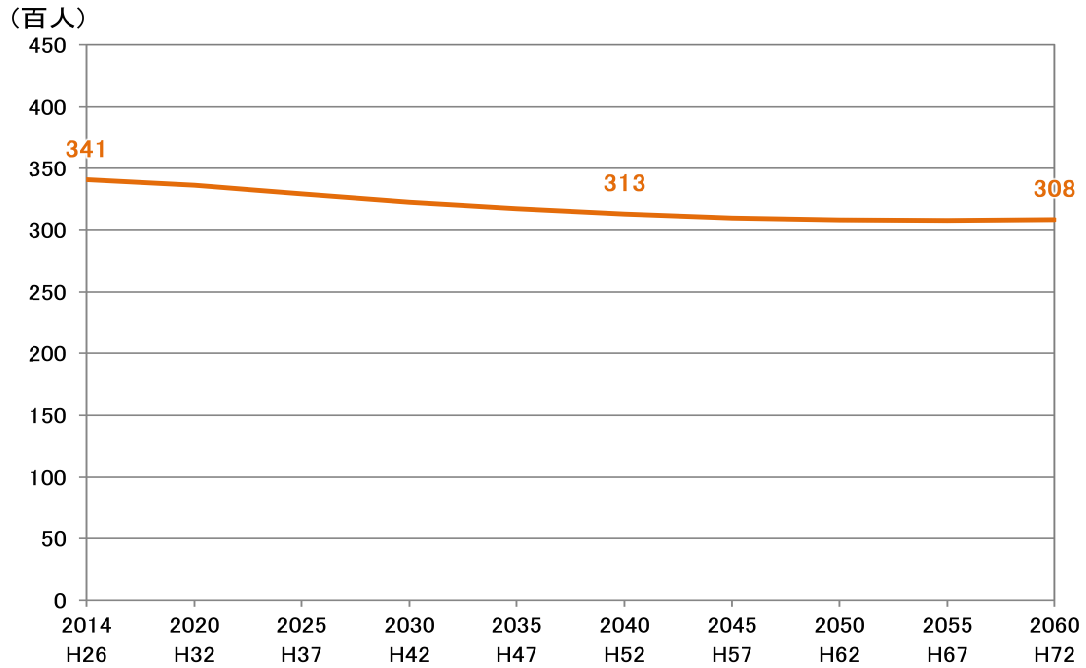
推計パターンによる年齢構成



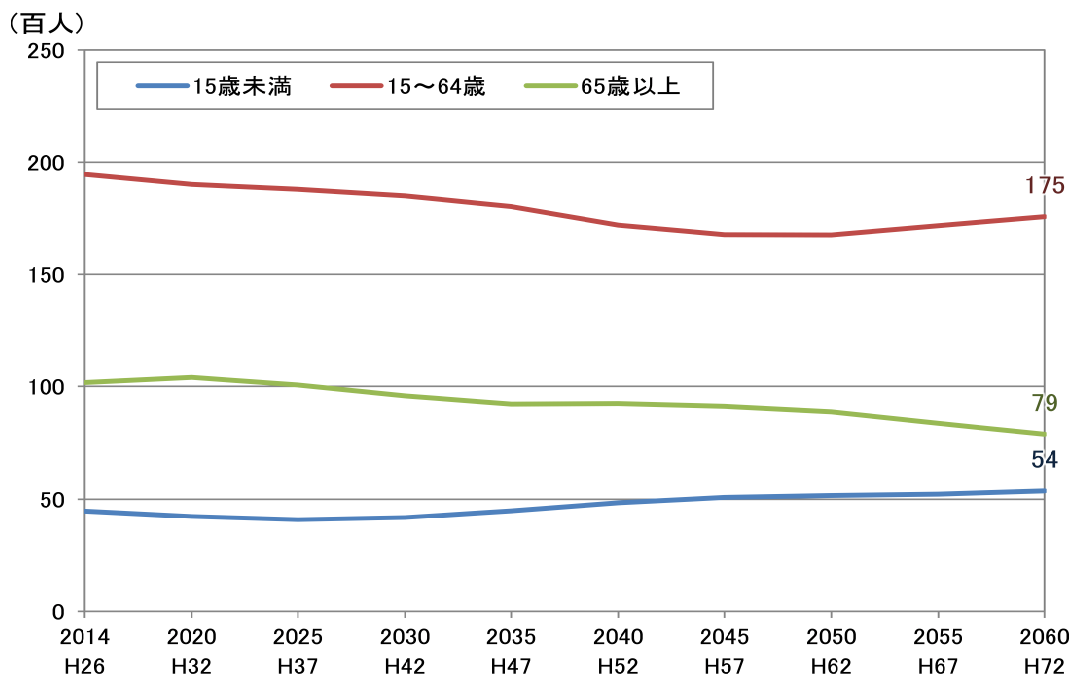
■香南市（全体）

自然減の縮小や社会増に向けた一連の施策を講じることにより、香南市の人口は、平成 52 年には 31,300 人、平成 72 年には 30,800 人になる見込みです。年齢 3 区分別人口をみると、出生率の向上により、15 歳未満の年少人口が平成 41 年以降、増加に転じ、それに伴い 15 歳～64 歳の生産年齢人口も平成 60 年を境に、増加する見込みです。一方、65 歳以上の老年人口は平成 30 年をピークに減少していく見込みです。

総人口

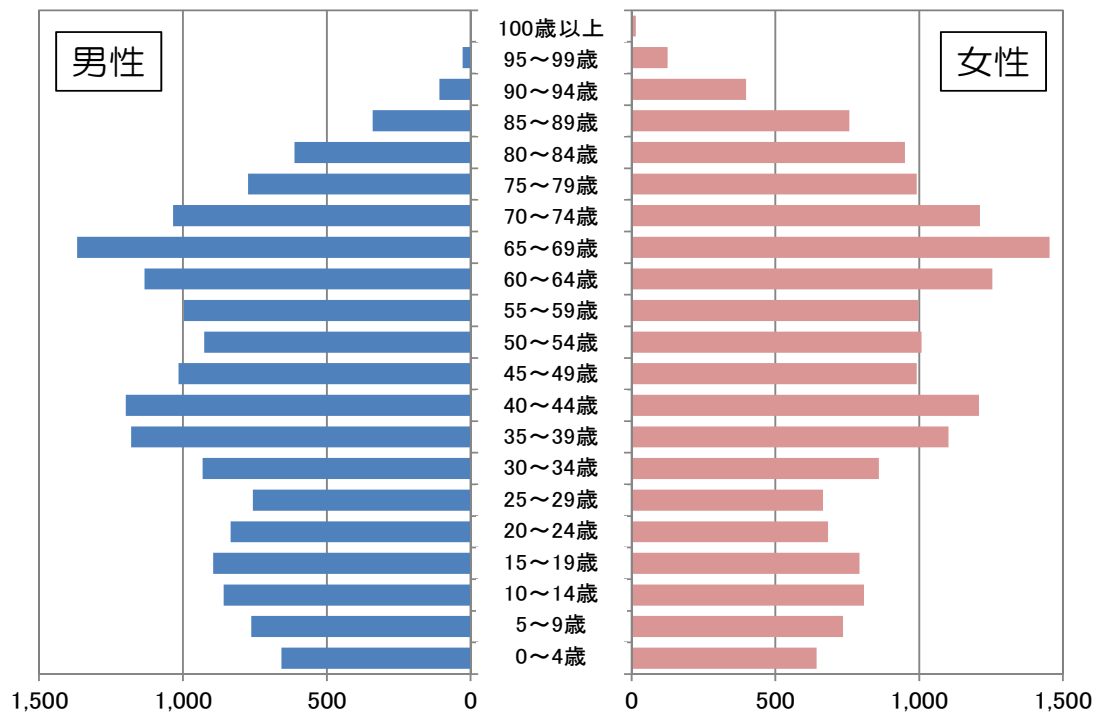


年齢 3 区分別人口

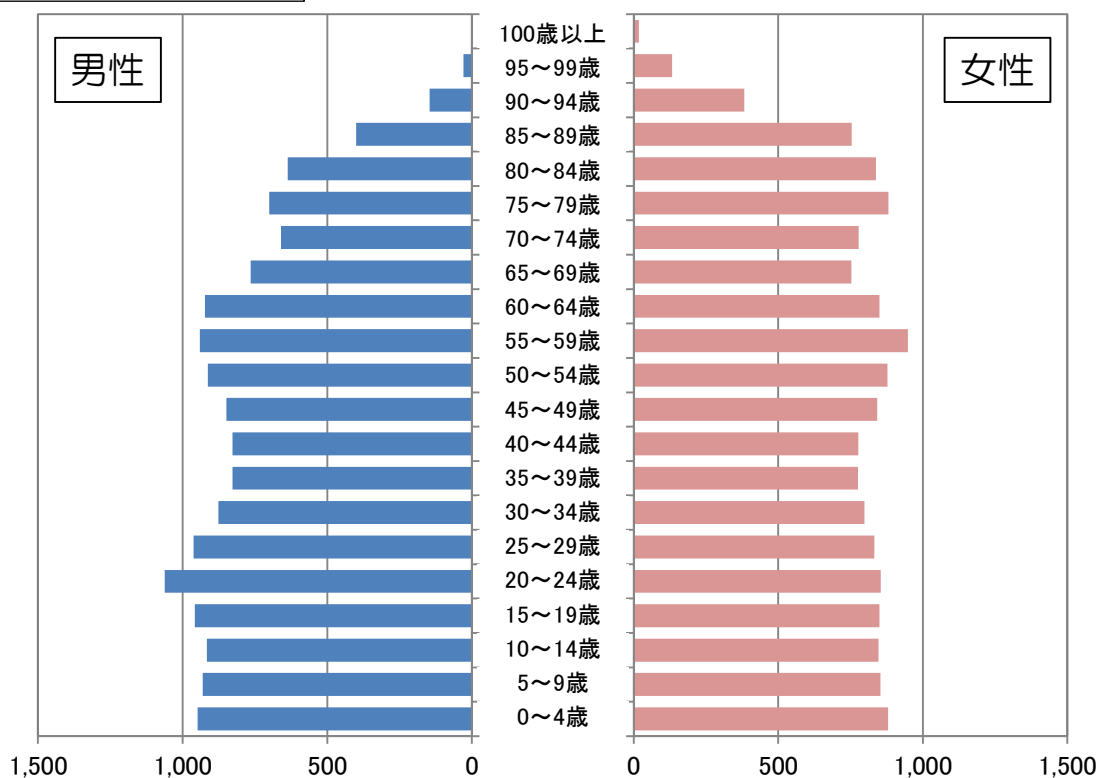


5歳階級別の人口ピラミッドをみると、2060年には15歳未満の年少人口および15歳～64歳までの生産年齢人口が、男性・女性ともに1,000人弱程度でばらつきがなくなる見込みです。

5歳階級別人口(2014年)

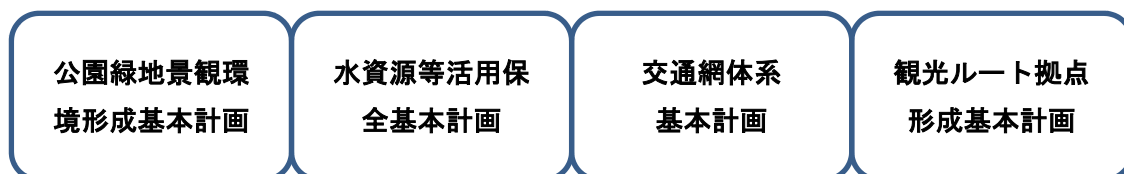


5歳階級別人口(2060年)



第3章 分野別基本計画

将来の香南市の都市像を描き、まちづくりに関する4つの分野ごとに現状と課題を整理し、これからのまちづくりに向けた方策や取り組みを検討し、基本計画を作成します。



第1分野 公園緑地景観環境形成基本計画

1 公園緑地景観環境形成の現状と課題

香南市の魅力は、なんといっても山・川・海に繋がる大自然の豊かさです。ランドデザインの上位計画である香南市振興計画では、「美しい水と緑に包まれた、元気で豊かに光るまち」を将来のまちの姿としています。

香南市が、今後とも持続可能で元気な地方都市としてあり続けるためには、香南市ならではのまちづくりを行っていく必要があると考えます。この恵まれた自然環境を積極的に保全し、活用するなかで、市民が元気に活躍する市域を創り上げることができます。そんな、まちづくりランドデザインを作ることができれば、それこそが、他の都市にはない、香南市独自のまちづくり目標になると考えています。

基本計画策定にあたって図上により土地利用を計測した結果、香南市の57%にあたる7,319haが自然地、16%にあたる2,051haが果樹園や田や畑などの農園地、18%にあたる2,306haがその他を含めた宅地、9%にあたる1,102haが公共用地となっています。

市民が安全で豊かな、恵まれた環境のなかで生活を営むためには、それぞれの地域で、自然環境が守られることが不可欠であり、地域の問題点と課題を次のようにまとめます。

【地域の問題点と課題】

地域	問題点と課題
自然環境・山林ゾーン	自然地は、一部の農地などを除いて、公有および民有の森林が大部分を占めており、香南市民が誇りとする山・川・海の豊かな自然環境の源となっている。しかし、森林の維持管理については、林業の衰退とともに問題となってきた。特に、所有者や管理者の生活状況などによって、管理状況に大きな差ができており、一部には管理放棄による荒れ地化が進みつつあるところも見受けられる。 今後は、森林資源は香南市民全員の環境財産であることを視点に置いた、持続可能で総合的な維持管理を実現することが課題である。 また、自然特性や地域特性を活かし、今後の香南市の都市的な発展に寄与する土地として活用を目指す方向も課題とされる。地震津波にそなえる高台移転用地、新しい活力を生み出す産業用地、時代に合った住まい方の実現を目指すＣＣＲＣ用地、広域的な観光や集客を目指すレジャー・レクリエーション施設用地など、計画的で目的に沿った方向で、開発整備を進めることも必要である。 したがって、このゾーンは保全地区と、活用・活性化地区の２つに分類して基本計画を検討する。
農業ゾーン	香南市を支えてきた主要産業である農業は、農業環境だけでなく、香南市の山から海に至る自然環境の維持や保全の大切な役割を果たしている。しかし、近年は農業の担い手の減少や農地の宅地への転用などにより、その営農状況が大きく変わってきた。 その一つに、休耕田・耕作放棄地の増加による農地や農業施設の荒廃や維持管理の不十分がある。また、園芸ハウスなど土地利用型農業による発展や、農地集積を図り、農業を振興していくうえにおいて、農地と住宅地等の混在化が農地の環境に悪影響を及ぼすことが懸念されつつある。 今後とも香南市の優れた自然環境を維持し保全する役割を農地に担ってもらうためには、しっかりとした考え方と方針をもとに農地の環境保全方針を確立することが課題となっている。
市街地ゾーン	山間部の豊かな緑や、優良な農地の自然環境に囲まれ、魅力ある自然環境のなかに立地してきた香南市の居住地区も、宅地化が進んだ人口集中地区や近年の農地の宅地化などにより、身近な自然環境地や遊び場が不足する地域も出てきている。 今後とも多くの市民が暮らす環境の良い住宅地は必要であることから、これまで整備などの方針を立てていなかった市街地部において、都市型の公園緑地計画をたてた上で必要な施設の整備を目指すことが課題となっている。
水辺環境保全緑地	香南市は、山・川・海の連続する自然環境に恵まれた地域であり、その自然環境を能動的かつ有機的に結ぶ役割をしているのが、水であり水辺と言われている。 今日までは、活力ある地域コミュニティや農業活動のなかで、しっかりと保全、整備されてきた水辺環境であるが、近年の集落過疎化による農業従事者の不足や地域コミュニティの弱体化などにより、十分な維持管理ができなくなる傾向があることが問題となってきた。 今後とも香南市に動植物の生息環境なども含めた、豊かで美しい自然観境地を守るためには、守るべき優良な資源資産の位置づけと保全への共通認識を育てるとともに、体系立てた計画的な水辺緑地環境の育成が課題となっている。
景観・環境	香南市の伝統的な環境は、山・川・海の自然を要素として守られてきた。しかし、今日にいたって農林業の低迷や従事者不足により、林地や農地の荒廃が大きな社会問題となってきた。 今後は、香南市の美しい自然環境を残すため、土地利用の規制誘導や、官民一体となった、また、共通の計画性を持った景観保全計画の確立が課題となっている。 それとともに、近年増加してきた住宅地などの非農用地においては、自然環境が失われつつあり、それに変わる計画的、都市的な景観形成の整備が必要となってきた。植栽、緑地などの自然景観や、民間建築、公共施設などの建築物と街並み景観、およびサインや照明、オブジェやファニチャーなどの市街地空間環境について、形成や創出を図ることも必要と考えられる。 また、森林の自然環境地、河川水路の水辺環境地、農業が主となる農園地の環境、並びに、都市部や集落の宅地などを、計画的に配置整備を行うことにより、それぞれの機能や暮らしや活動を守るための景観環境形成も、積極的に検討することが求められてきている。

2 公園緑地景観環境形成基本計画

(1) 自然環境・山林ゾーン（保全地区）

香南市の市域を取り囲むように広がっている自然環境・山林ゾーンのなかには、一部の集落に小規模な農地が存在するものの、多くは自生の広葉樹などの植生が見られる自然林や杉、ひのきなどの植林、および竹林や果樹園などに利用される自然地で、自然環境・山林ゾーンの骨格的な機能を有する地区となっています。この自然地は、香南市の水や空気や地形地質の自然環境を創り上げ保全している循環機能や、動植物などの生態系保全の機能を有している、大切な自然財産です。

今後とも、以下に掲げる基本方針をもとに、香南市の大切な財産を保全し、また、より有効な活用を図るものとします。

①自然地の活用

自然林	香南市の自然特性を継承し、水と緑の循環機能の源である自然林については、環境や地形を保全し、自然植生を守るための下草処理などや間伐などを積極的に行う地区とする。
植 林	現在残っている植林地は、今後とも豊かな自然資源として活用することとし、下草処理や間伐などを適切に行い、活性化の優良な資源として利用できる木材については、計画的かつ適正に伐採し、利用促進を図る。
その他 (竹林、農地等)	竹林、果樹園、農地などは、今後とも優良な地域産業地として活用を図る。

②実現に向けた検討項目

管理組織育成	生産量や生産額を確保することが大きな問題である。私有地、公有地などの枠組みを超えて、協働で生産、維持管理、後継者育成を行っていくことが必要である。 今後は、土地の一括管理を目指し、買収、寄付採納、管理委託などにより、管理組織の育成を図ることが必要である。
組織の持続可能機能育成	組織が管理を維持するためには、採算が見込める生産、加工、販売などの活動を伴った、自律可能な組織が必要であり、活性化拠点運営組織の形成を目指す。
土地の一括管理	管理組織が実行力をもって自律可能な形態を有するためには、細分化された自然地の所有形態をできるだけ一本化し、活動や権利を継承できる体制を整えることが必要である。

（２）自然環境・山林ゾーン（活用・活性化地区）

山林のなかでも農地や市街地に近接した一部の里山では、古くから中山間集落地としての土地利用や地域の身近な農用地などが混在しており、自然地の骨格的構造に大きな影響がなく、道路や河川などが近接している自然地は、香南市の市民生活や産業活動の発展を支える空間として利用する対象地区とします。

①自然地の活用

活性化拠点となる産業用地	香南市の地場産業の誘致や育成を図る地域とし、製造型、組立型、流通型などの工業団地等として活用を図る。
研究開発型産業誘致	水と緑の豊かな自然環境と、都市に近接する立地条件を活かし、研究開発型などの産業の誘致を図る。
公益福祉施設などの誘致や高台移転	福祉、医療、介護、教育などの公益施設の充実や生涯活躍のまち(CCRC)の検討、高台移転用地として活用を図る。
自然体験型の市民憩いの空間	動植物園や観光体験型農業など、来訪者が自然とのふれあいを経験できる施設や、空間を活かしてのびのびとした環境で体験できる、レジャーレクリエーション、スポーツなどの施設地として活用を図る。

②実現に向けた検討項目

活用緑地の空間整備や施設立地には、土地の集約業務や、造成・建設業務など、個々の事業主体が行わなければならない事業があります。したがって、民間企業や公益、公的施設の誘致を図るとともに、目的にあった活動を推進する事業組織を形成し、持続可能な活動と維持管理を行うことができる体制づくりが必要となってきます。

そのため、事業主体が採算性確保のために以下のような事業をあわせて行うことの検討も必要になってくると考えます。

運営費拠出のための団地運営	施設整備とともに、賃貸型流通団地や、賃貸住宅などを整備し、ランニングコストの確保を図る。
事業費創出のための分譲宅地（公益施設移転用地、分譲建売住宅等）	開発や施設整備に係わる初期投資費用のできるだけ早い回収を目指し、公益施設用の高台移転用地の分譲や、転入者を対象とした分譲建売住宅などの分譲を行う。

（３）農業ゾーン

香南市は農業を主要な産業として発展してきており、農地は土地利用の骨格部分を占めてきています。その役割は、市民にとっては、美しい水と緑の環境地や自然景観の保全により快適で豊かな生活環境を補完するものでした。

また、香南市の自然体系にとっては、水や風（空気）の流れを作り、自然資源の循環を図るとともに、動植物の生存環境を育み、結果として香南市の豊かな自然環境を形成し保全してきました。

しかし、近年の都市化の波により、土地利用の転換を伴う市街地化が顕著になり、農業の環境保全に悪影響を与えるようになってきています。また、農地の環境悪化は、農業や自然環境に悪影響を与えるばかりでなく、水処理、衛生、安全、健康などの市民生活にも悪影響を与えるものとなっています。

今後は、市街地の農業用地との明確な役割分担が可能なように、国の施策等も勘案しながら、それぞれの環境を保全するとともに、緑地や水資源などによる緩衝機能を設けるなどにより、保全・活用を図ります。

（４）市街地ゾーン

①都市公園の考え方

市街地ゾーンにおいては、都市緑地法（昭和 48 年施行）や都市公園法（昭和 31 年施行）の基本理念にもとづき、居住環境を形成する重要な憩いや緑といった居住環境を提供する空間として、良好な都市環境の形成を図り、健康で文化的な都市生活の確保に寄与する目的の都市公園などを配置することを基本と考えます。

また、都市公園などは、既存の公園の配置や市街地の形状などを考慮し、街区公園と近隣公園を基本として構成することとします。

公園	基 準
街区公園	香南市の人口構成並びに土地利用状況を鑑み、誘致距離 250m、標準面積 2,500 m ² を標準とする。
近隣公園	香南市の人口構成並びに土地利用状況を鑑み、誘致距離 500m、標準面積 20,000 m ² を標準とする。

②街区の考え方

香南市の市街地の状況を考慮し、香南市における街区の標準を、次のように考えます。

街区形状の基本単位	一辺が 1 k m 程度で、幹線道路などで区切られた面積約 100ha の地区を街区のモデルとする。
街区の細分化	街区は、約 500m 間隔の補助幹線道路などで区切られた 4 つの細分地区により構成され则认为。
街区の人口	香南市の土地利用状況ならびに市街地の人口密度などの現況等を考慮し、1 街区約 4,000 人程度を想定する。

③公園緑地の配置

公園	配置規模
街区公園	誘致距離約 250m、面積約 2,500 m ² で配置し、1 街区の標準は、4 箇所の街区公園で面積約 10,000 m ² とする。
近隣公園	1 街区に標準 1 箇所の近隣公園を面積約 20,000 m ² で配置する。
一人あたり公園面積の	街区人口標準 4,000 人とし、街区公園面積標準 30,000 m ² とし、

目標	一人あたり公園面積の標準は、7.5 m ² とする。
公園面積率	100ha の街区面積に対し、3 h a の都市公園を配置するものとし、公園面積率の標準を3 %程度とする。

④都市公園の整備計画

集約をするべき地区	8 箇所
公園整備すべき地区	22 箇所
整備計画数	全体で 77 箇所
新規に整備必要面積	226,500 m ²

⑤実現に向けた検討項目

標準の共有化	市街地における都市公園の設置規準を明確にし、市民、行政、企業、開発者などの関係者が協力して整備、保全を図る方向を確立させることが必要。
民間開発指導	新たな宅地開発などによる土地利用更新時には、開発者による公園整備、公園用地提供、あるいは、公園整備負担金の拠出など、公園整備推進に向けた制度検討が必要。 そのためには、香南市全体の都市公園などの配置計画を策定し、行政、市民、企業が共有することと、公共施設整備、面的整備事業などによる開発時における公園整備規準を明確に行う必要。 また、小規模開発などの標準面積以下の小規模公園の乱立を防ぐため、標準面積が十分に確保できない場合や、公園配置計画にそぐわない場合などに対応し、公園整備相応の事業費に対応する負担金を徴収し計画的な整備に備えた基金とする方向が必要。

(5) 水辺環境保全緑地

①山から海への水と緑のネットワーク

香南市の自然体系や生態系を築いていると考えられる、森林、河川、水路、海を有機的に結ぶ水辺機能については、ネットワーク化して保全を図ります。また、水と緑のネットワークは、香南市の自然特性から、次の4つの構成要素を連携することで完成させます。

- 山の緑
- ため池、水源涵養池、洪水調整池
- 河川および幹線水路
- 海岸緑地（防波堤などの法面などを含む）

②水と緑の保全緑地

森と緑のネットワークを構成する、ため池、水源涵養池、洪水調整池、河川、幹線水路などの水辺には、維持管理空間を兼ねた、親水、ふれあい、散策のための緑地（2～4 m）を設置し、水と

緑の保全緑地として自然環境保全とともに、市民の憩いの場としての機能の創出を図ります。

③農業用排水路の活用

農業を主として土地利用が図られてきた過程で、農業用排水路は、水資源の利活用だけではなく、香南市域の水と緑の循環機能や景観環境保全機能の主役として、その役割を果たしてきました。

香南市がいつまでも魅力あるまちであり続けるためには、今後とも、恵まれた自然環境を保全する必要がありますが、近年の農業の衰退に伴い、その維持管理が充分に行うことができない状況も発生してきています。

今後は、農業基盤整備や農業従事者だけに頼っていた農業用排水路の整備や維持管理を、香南市全体の重要な資源と位置づけ、水と緑の保全活用事業の一貫として保全や維持管理を行う仕組みを作ることが課題となっています。

（６）景観・環境

①水辺環境の活用

水辺環境保全緑地を活用し、ハイキング、ピクニックなどの憩いの広場を創出するとともに、ネットワーク性を活かし、散策路、サイクリングロード、マラソンコース、各種トレイルコースなど、市民の憩いの空間を形成します。

②景観形成

香南市の固有の景観要素として以下の項目をかけた、有効活用を図ります。

- 農地の景観を活用し守る。
- 三宝山などの山からの景観や、ヤ・シィパークなどの海の景観を守り育てる。
- 街並みや植栽などの計画的な景観形成を図る。

③環境形成

安全で効果的な香南市の環境を構築するため、以下の施策を図り、環境形成を図ります。

- 生活排水、農業用排水を系統的に排出し、衛生的で安全な水環境をつくる。
- 農業環境および農業施設は、農業従事者だけではなく6次産業従事組織と連携した、維持管理組織の創出を図る。
- 市街地においては、市民生活と自然体系の調和を図るため、敷地内緑化とともに、水路、緑地、公園、歩道などの緑化やネットワークを形成し、香南市独自の市街地環境を保全する。
- 市民生活から排出される廃棄物の適正な処分システムとリサイクル体系の強化を図る。

【公園緑地基本計画図】



凡 例			
自然環境森林ゾーン		緑	
水辺環境 保全緑地	河川	青	
	水辺緑地	緑(河川沿)	
	水路	青	
公園 (市街地ゾーンのみ)	街区公園		
	近隣公園		
	その他緑地	濃緑	

第2分野 水資源等活用保全基本計画

1 水資源等活用保全の現状と課題

水資源は、私たち人間にとっても、また、動植物の生態系や地盤、土地などの形成にとっても大切な自然資源ですが、時として、大きな災害を引き起こすものです。

したがって今回は、香南市に降った雨のすべてを対象とし、どのように安全に処理し、また、どのように効率的に活用していくかの基本方針を検討するものとししました。

(1) 水資源の基本的な処理方針

香南市で活用している水資源は、河川、ため池、地下水が主なものであり、その利用は、生活用水、農業用水、工業など産業用水などが主なものとなっています。

このことにより、当然なことです。処理や利活用している水資源は、香南市および周辺などに降った雨が基になっていることを再確認しておく必要があります。

降雨による 雨水量の 把握	香南市域全体は、大きくは物部川上流域、物部川下流域、烏川流域、香宗川流域、岸本川流域、夜須川流域に分かれている。しかし、雨水排水や水源涵養の方法は各流域で統一されたものがなく、地域の実情に合わせ個別の対策に頼っているところが多い。 今後ますます進む都市化と過疎化や農地の再編成などをにらむと、維持管理や施設更新あるいは合理化や経済性を高める施策改良などを進めるにあたっては、統一した考えのもとに、総合的で全体的な雨水排水体系を持つことが必要となってきた。 そのため、本基本計画では、香南市の降雨に対する考え方と、その処理や利活用、並びに保全についての全体方針を明らかにすることが課題となる。
---------------------	--

(2) 課題

この考えをもとに、以下のように現状と課題をまとめます。

処理方法	現状と課題
①河川排水	香南市を流れる河川並びに重要河川の状況は、降雨により流出してくる雨をすべて安全に排出できるだけの機能が、すべての河川で整備されているわけではない。また、一定以上の降雨量を安全かつ確実に排水する能力を持つ河川の整備には、莫大な費用と時間が必要となる。 そのため、本基本計画では、河川の許容量を超えない雨水排出計画を策定する必要があり、まず、河川の流下能力を明確にすることが課題となる。
②雨水排水	河川などに流れ込む雨水は、基本は雨水排水路等を経由して流れ込むのが基本となる。しかし、香南市の現状は、一部の雨水排水施設のほかは、ほとんどが道路側溝や農業用排水路を利用して処理されているのが現状で、系統立てた排水経路や放流量を十分に考慮した排水路は未整備である。 そのために本基本計画では、香南市域に降った雨は、すべて雨水排水専用の

	水路を經由して安全かつ速やかに河川などに放流することを基本とする排水計画を検討することが課題となる。
③農業用水	香南市の農用地の灌漑に寄与する用水路および排水路は、現在、雨水の流入を考慮したものではないにもかかわらず、実際には多くの雨水排水や家庭からの雑排水などが流入している状況である。 そのため、本基本計画においては、農地に必要な灌漑用水について、水源、用水路系統、排水路系統を検討し、農業用排水と雨水排水とが分離又は充分調整の採れた水路計画を検討することが課題となる。
④水源涵養	降った雨は水路や河川に流れるほか、地下に浸透し、それが地下水や湧水や遊水となるが、香南市では、河川の水や地下水を飲料水や農業用水、あるいは製造業や商業などの産業用水として利用している。 しかし、地下水や遊水などは限りある資源であり、水利用を安定的に確保するためには、自然環境と調和の取れた水源涵養を行うことが必要である。 一方、香南市の発展は、水源涵養可能な自然地形を農業用用地や産業用地あるいは住宅用地にと個別対応で土地利用転換を行ってきており、全体のバランスを考慮した地下水涵養対策は充分に取られていないのが現状である。 今後とも香南市が元気で豊かな都市であり続けるためには、都市規模や自然循環体系に見合う水源を確保する必要があり地下水涵養施策が必要となる。 本基本計画においては、豊かな自然資産である山林を保全するとともに、本来兼ね備えていた水源涵養機能を失わないよう計画的な地下水涵養施策を検討することが課題となる。
⑤生活産業関連水の処理	香南市の生活産業関連水処理としては、供給源となる簡易水道、上水道、井戸などがあげられ、汚水処理としては、公共下水道、集落排水下水道、コミュニティプラント、合併浄化槽などがあげられる。 近年の香南市は都市化による人口増、過疎化による人口減、あるいは、産業構造の変化による産業用水の使用量の変化などが課題となっている。

（３）雨水処理の考え方

①全体条件

香南市はこれまで農業用排水路に頼って雨水排水などを行ってきたため、宅地化された市街地での雨水排水施設が脆弱です。また、系統的な雨水排水路の整備が遅れていることなどの課題があります。さらには、それらが流れ込む河川の形状なども異なっています。

したがって、香南市の雨水は、物部川、烏川、香宗川、岸本川、夜須川の河川流域に分けて考えるとともに、河川によって整備水準が異なっていることを前提に考えることします。

②雨水排水量把握の考え方

降った雨を水量として捉えるため、降る雨の量については降雨強度式により算定するものとします。浸透する量については、土地利用別の流出係数を指標とします。

流出する雨の量を $Q \text{ m}^3/\text{秒}$ とすると、以下の式により表されます。

●計算式の考え方

$$Q = 1 / 360 \times C \times I \times A$$

C = 平均流出係数（率であり単位なし）

I = 降雨強度式（mm/時間）

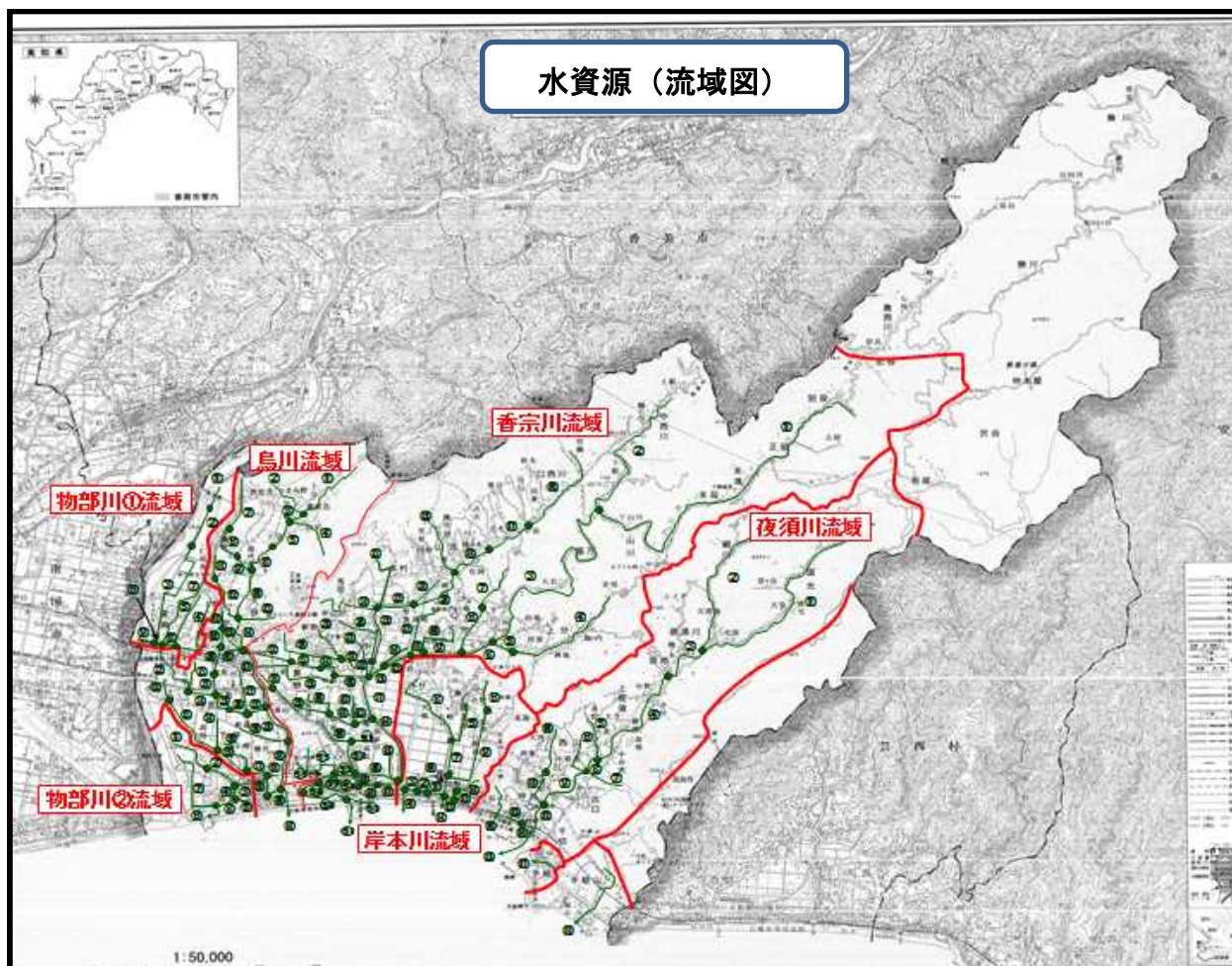
A = 面積（ha）

2 水資源等活用保全基本計画

① 河川排水

（1）流域区分

香南市の降雨により流出する雨は、地下に浸透するもの、並びに蒸発するものを除き、河川や海に放流されることになります。



【流域区分】

(2) 流域の現況

流 域	現 況
①物部川（上流） 流域	物部川の基本高水のピーク流量は、5,400 m ³ /s である。 物部川（上流）流域の雨水は、西町の落としから物部川に放流されている。
②物部川（下流） 流域	物部川の基本高水のピーク流量は、5,400 m ³ /s である。 物部川（下流）流域の放流先は、吉川漁港で、物部川には直接放流していない。
③烏川流域	烏川は確立10年で改修済みである。烏川流域の最終放流計画は香宗川であり、許容放流量は水位100 m ³ /s である。 支線、下井川は確立10年で改修される予定であるが、地区外からの農業用水の流入があり、高水時の農業用水排除が問題となっている。
④瀬戸川	瀬戸川は、農業用排水路として機能しており、高水時には雨水も流入する形となっている。
⑤香宗川	確立50年で改修済みである、支線の山北川も50年で改修されている。その他の支線として、山南川は、確立10年で改修されており、烏川も前述したように確立10年で改修されている。
⑥岸本川	岸本川は、農業用排水路として機能しており、高水時には雨水も流入する形となっている。
⑦夜須川	夜須川は未改修の河川である。現況の河川整備の記録が不明のため、現況がどの程度の流下能力を持っているのか不明である。

② 雨水排水

(1) 全体条件

①河川の流下能力断面

物部川と香宗川本流を除く河川については、10 年確率の暫定断面で整備されるものとします。未整備の夜須川などは、10 年確立以上の暫定断面による河川改修を強く要望することとします。

また、将来的には、香南市すべての河川で 30 年確率以上の断面の整備が必要であると考えます。

②幹線水路の断面

河川に放流する幹線水路の整備は将来の河川許容放流量に合わせ 30 年確率とします。

③支線水路の断面

幹線水路に流れ込む支線水路は、10 年確率以上の整備水準を確保します。

④幹線水路の調整池

幹線水路については、河川の現況の許容放流量以上の雨水流出が発生しないように、30 年確率の降水量を対象として調整池を設けて放流量を制限し、30 年確率以上で整備される以前の状況に対応します。

⑤土地利用転換による調整池

宅地開発等で土地利用形態が代わり雨水流出量が増加する場合で、放流する幹線水路が 30 年確率で整備されていない地区の新規宅地開発などでは、30 年確率の降水量に対し、現況幹線水路および現況河川の許容放流量のいずれか少ない許容放流量以下まで調整池により放流量を制限する方法を検討項目とします。

(2) 検討結果

雨水排水計画を担う、将来の河川、並びに、幹線水路およびその支線をまとめ、雨水排水基本計画を取りまとめます。

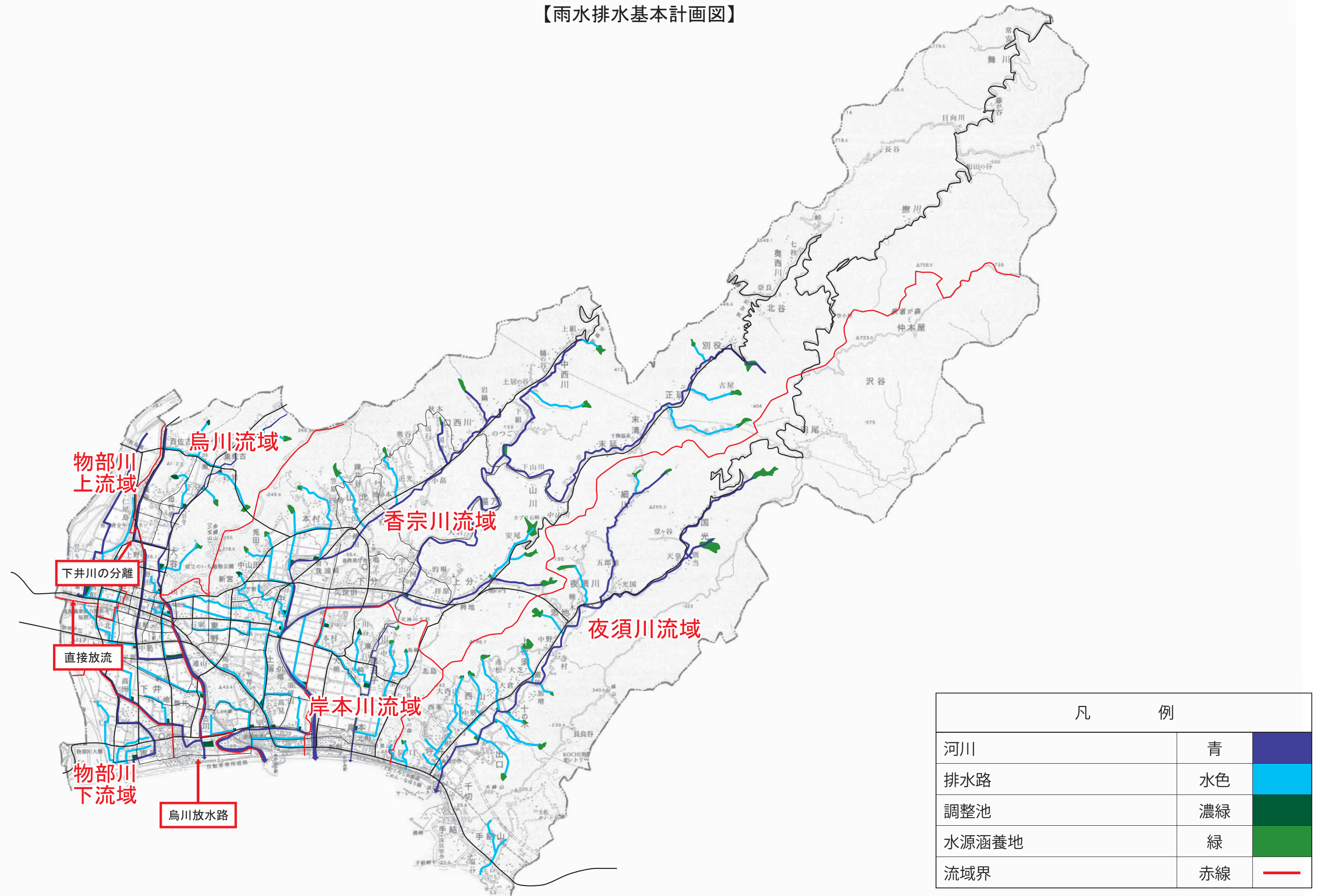
濃い青が河川で、水色が幹線水路です。香宗川本流は、50 年確率なので、幹線水路の調整池は入りませんが、夜須川や烏川では幹線水路の合流には調整池を設置するのを基本とします。

(3) 整備課題

雨水排水基本計画では、現況から変更したい点と整備課題を次のようにまとめます。

変更したい点	整備課題
下井川の上流域と下流域の分離	下井川は、上流域で烏川にショートカットをし、下流には上流の雨水を流さないようにすることが課題となる。
物部川への直接放流	物部川上流域の雨水を、国道 55 号線付近で物部川本線に放流することが課題となる。(既に物部川への直接放流は行っているので、許容放流量の変更協議が必要)
烏川下流の流下能力低下の解消	烏川は旧香宗川とぶつかり合うように合流しており、また、潮位により海水面が上昇することもあり、両河川とも流れにくいのが現状となっている。それを解消するためのポンプ排水や放水路整備等を設置することが課題となる。

【雨水排水基本計画図】



③ 農業用水

(1) 農業用排水の現況

現在、河川から堰などにより灌漑を受けている、そのエリア（農道や水路を含む）面積は図上計測で約 803ha であり、ため池や井戸水により灌漑されているエリア（農道や水路を含む）面積は、図上計測で約 846ha となっています。

(2) 灌漑計画

用水供給の河川整備計画を考慮し、河川から堰などにより灌漑を受けるエリアは 13 地区として統合し、また、ため池や井戸水により灌漑されているエリアは、系統的に用水確保を図るため、18 地区に統合することを検討します。

④ 水源涵養計画

(1) 水源涵養の考え方

自然的土地利用の流出係数 0.6 以上の流出が起こると想定される地区を流域毎に総数を把握し、0.6 をオーバーする総流出量と同量の雨水量を、流域内で浸透させるものとします。

■流出係数を指標とした涵養必要量

土地利用	オーバーする流出係数
自然地・畑	必要なし
田	0.15
宅地	0.3
公共用地	0.3

(2) 水源涵養の方法

香南市の年間平均降雨量 2,220mm（2014 年）をもとに流出係数別土地面積を調べ、必要な浸透量を算定し、自然緑地と農地や集落が接する河川・水路の水源地に、自然工法やビオトープを考慮した自然を身近に親しめる緑地空間としてため池や湿地帯を確保し、雨水放流の調整を行いながら必要量を浸透させることを検討します。

(3) 必要涵養容量

年間平均降雨量 2,220mm（2014 年）に対する流域別必要灌漑用水量を算定します。算定には、年間 100 日を対象日数とし、必要灌漑容量と必要ため池面積を算定し、既存のため池面積を控除した値を整備目標面積とします。

流 域	整備目標面積
物部川、烏川流域	浸透を考慮することが必要な面積は約 1,233ha で、必要灌漑容量は、年間約 591 万 m^3 と算定された。また、それに対応する必要ため池面積は、約 93,000 m^2 とする。
香宗川流域	浸透を考慮することが必要な面積は約 2,267ha で、必要灌漑容量は、年間約 1,105 万 m^3 と算定された。また、それに対応する必要ため池面積は、約 170,000 m^2 とする。

夜須川流域	浸透を考慮することが必要な面積は約 857ha で、必要灌漑容量は、年間 443 万 m ³ と算定された。また、それに対応する必要ため池面積は、約 73,000 m ² とする。
-------	--

⑤ 生活関連水の処理

（１）公共下水道および集落排水下水道

地域の整備促進とともに、施設の老朽化などへの対策が問題となっており、区域や施設の統廃合なども視野に入れた、今後の経済的かつ効果的な公共下水道施策の再検討の必要があります。

（２）コミュニティプラント

大規模な施設や団地などでは、集約的な汚水処理を行うためコミュニティプラント方式で汚水処理を行っています。今後は地域の実情や開発の動向などを踏まえ、より効果的で経済性の高い手法の一つとして、コミュニティプラントでの処理を検討する必要があります。

（３）合併浄化槽

集約的な汚水処理施設が整備されていない地区では、汚水処理は合併浄化槽となります。今後とも宅地開発などの進展に伴い合併浄化槽が増加すると考えられるが、汚水処理水の放流先排水路の整備が遅れています。そのため、総合的で官民共同型の排水路整備の実現化について検討する必要があります。

（４）その他処理

現在も単独浄化槽や浸透に頼る汚水処理等を行っている所も残っているが、衛生面や公害、また、自然環境への悪影響などが考えられるので、合併浄化槽や放流先排水路の整備をできるだけ早急に行うことを検討します。

第3分野 交通網体系基本計画

豊かな自然に恵まれた市域で、元気で活力ある市民生活や市民活動が営まれるためには、交通や物流あるいは人と人との交流を支える骨格交通網が不可欠となります。

そのため、人口規模や産業規模に見合った道路網計画や公共交通などを構築する必要があり、香南市全体を対象とした幹線道路網計画や公共交通サービスの考え方を検討します。

1 交通網の現状と課題

(1) 鉄道、バスの現状

香南市には南国市ごめん駅と奈半利町を結ぶ「土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線」の鉄道駅として、のいち駅、よしかわ駅、あかおか駅、香我美駅、夜須駅の5つが整備されています。

広域バスとしては、安芸と南国を結ぶ、とさでん交通のバス路線が香南市内を通っています。

そのほか、香南市内では、香南市営バスが運行されています。

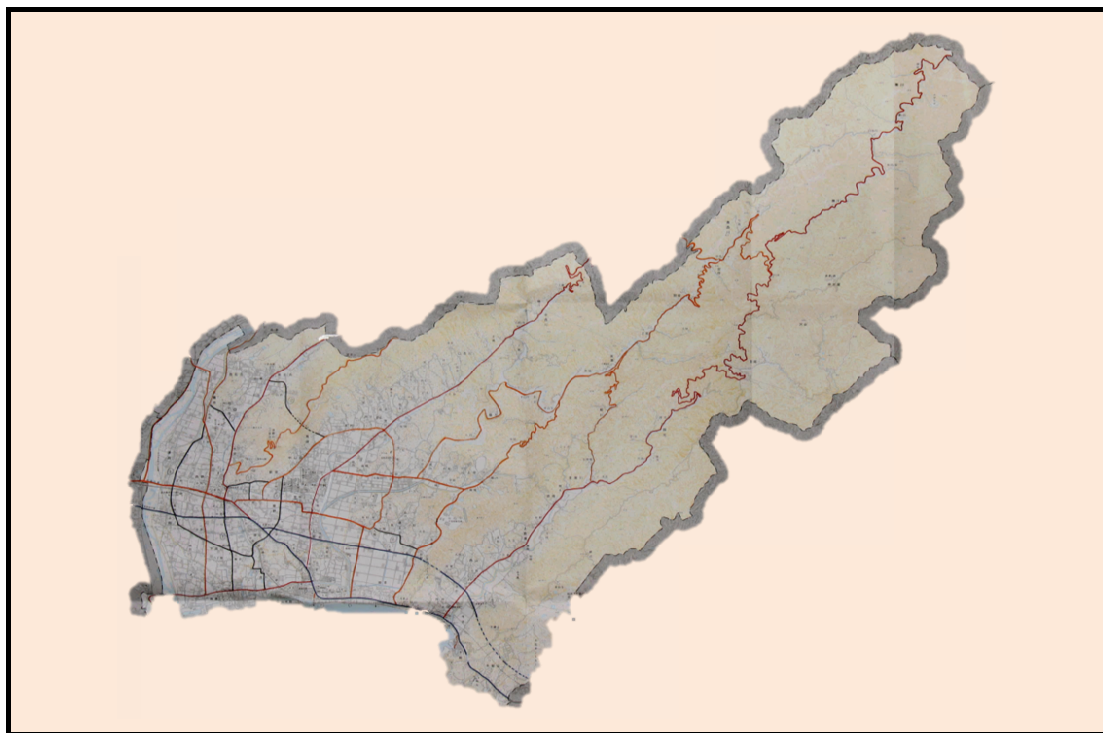
(2) 国道、県道の現状

香南市には4車線（一部2車線）の国道55号や高規格の東部自動車道が、東西の重要幹線として整備されています。

また、周辺市町村と結ばれる主要地方道が5路線、地域間を結ぶ一般県道として16路線が位置づけられており、そのほか、高知と安芸を結ぶ自転車道も整備（一部未整備区間あり）されています。

(3) 市道、その他道路の現状

香南市には香南市道のほか、2項道路および民間開発などにより整備された位置指定道路や公衆用道路などが市民の生活道路として利用されています。



香南市の主な交通網

(4) 交通網などの課題

香南市の鉄道、バス、道路および道路網などの課題は、以下の表のようにまとめられます。

①鉄道、バス

名称	現状	課題
ごめんなはり線	高知県東部の重要な公共交通機関であり、県民の日常生活を支える足として活用されている。	人口規模が小さいため採算が取りにくく、持続可能な経営形態の構築が必要である。 また、各地域の市民の足となっているバスなどとの乗り継ぎや協力事業実施など、周辺の他の交通との機能的な連携も望まれる。
とさでん交通バス	日常利用の他、通勤通学に利用しやすく、市民の便利な公共機関の役割を果たしてきている。	採算性の面から、バス停の増加や路線の新規増加などは難しいが、市営バスや鉄道との連携方向を検討することが必要である。
市営バス	保育所幼稚園や小中学校などの遠方からの通学支援のスクールバスとして運行されるとともに、できるだけ多くのニーズに応えられるよう、市内各地にルートをつくり、運行しており、市民生活に重要な役割を担っている。	より充実したサービスが可能な運行方法の検討が必要で、スクールバスとしては、保育や学校教育などの実態や学校区の状況に合った運行が求められ、市民利用としては、運行本数やサービスエリアの改善、および利用者増や収支改善対策が求められる。

②国道等

路線名	現状	課題
国道 55 号	香南市南部の海岸沿いに国道 55 号が東西に走っている。西部南国市界から香我美駅前までが 4 車線で整備され、それ以东は芸西村界まで 2 車線で整備されている。	香南市の市街地はこの国道沿いに発展してきており、国道 55 号を利用する市民は多い。 また、現在は香南市の東西の通過交通の処理を担う一般道路はこの国道だけであり、市民利用と重なって交通量が多く、現在整備が進みつつある東部自動車道や香南市内のその他の幹線道路への通過交通の計画的な分散を図る必要がある。
東部自動車道	芸西西 IC から野市 IC までは片側一車線の整備が完了し、通過交通や市街地を目的とした交通が多く、便利な幹線道路として利用されている。南国市街地や高知市街地と直接結ばれる予定であり、香南市の都市間交通需要や通過交通の処理を担う重要な幹線になると期待されている。	今後は、香南市に整備済みの 3 箇所のインターチェンジに市内からの需要交通がスムーズに導かれるための接続道路網のさらなる整備と、自動車道と市内幹線道路の計画的な立体交差の整備が必要となってくる。

③主要地方道

路線名	現状	課題
春野赤岡線 (14 号)	高知市南部や南国市南部の市街地と香南市を結ぶとともに、空港へのアクセス幹線として重要な役割を担っている。	都市間交通や空港に近い立地条件を活かし、地域活性化を目指す新たな土地利用需要に見合った道路機能の整備が望まれる。
龍河洞公園線 (22 号)	香南市の中心市街地と香美市東部市街地を結ぶ重要な役割を担っている。	香南市と香美市の都市間交通を担うための機能を充実させるための幅員確保並びに香南市市街地の広がりに対応し、中心部から南部市街地までの延伸が望まれる。
安芸物部線 (29 号)	安芸市から香南市舞川を経て香美市物部地区へ結ばれる道路であり、香南市北部の物部川流域に立地した。集落の幹線道路である。	道路機能の維持は必要であるが、香美市物部地区や香南市舞川地区の中山間集落は過疎化が激しく、今後の道路の役割や道路網の在り方は再検討する必要がある。
香北赤岡線 (30 号)	香南市香我美地区の幹線であると共に、香美市東部市街地に結ばれる幹線道路である。	香我美市街地と赤岡市街地を結び、主要地方道 14 号を經由し高知空港並びに高知市南部市街地に接続した重要路線であり、充実した道路機能の整備が望まれる。
夜須物部線 (51 号)	東西および北を山に囲まれた夜須地区の地区内幹線であり、また、地区外に向かう道路に接続した重要な幹線である。	道路機能の維持は必要であるが、羽尾地区や舞川地区の中山間集落は過疎化が激しく、今後の道路の役割や道路網の在り方は再検討する必要がある。

④一般県道

路線名	現状	課題
奥西川岸本線 (221 号)	岸本駅から自衛隊駐屯地を經由し北部末延まで結ぶ役割を担っている。	自衛隊駐屯地以北では、新規集落の過疎化もあるが沿道の新機能立地への対応も考慮した機能整備が望まれる。
末清夜須線 (222 号)	夜須北部と香我美北部を結ぶ道路である。	集落の過疎化が進んでいるので、将来の機能整備について再検討も必要である。
奈良香北線 (224 号)	香南市北部と香美市北部を結ぶ役割を担っている。	集落の過疎化が進んでいるので、将来の機能整備について再検討も必要である。
手結港線 (225 号)	手結新港へのアプローチ道路である。	手結新港の活用や活性化に寄与した道路となることが期待される。
山北岸本停車場線 (227 号)	東部自動車道の IC へのアプローチ道路として重要な路線である。	岸本市街地の街並み整備と歩調を合わせた機能整備が望まれる。
赤岡停車場線 (228 号)	赤岡駅へのアプローチ道路である。	赤岡市街地の整備改善と連携し、今後とも地域利便性に寄与した道路として期待される。
稗地中村線	香我美町の北部住宅地や産業地を	地域発展軸であるとともに、香南市全体の環状道路

(230 号)	東西に結ぶ重要な幹線である。	の一角を担うことが期待される。
山川野市線 (231 号)	香我美町北部の中山間地の交通を担う道路である。	高台の特性を活かした新たな都市機能立地を誘導した幹線として期待される。
山北野市線 (232 号)	岸本北部の発展を担ってきた幹線道路である。	沿道土地利用の形態変化により、ネットワークや道路機能の見直しが必要である。
土佐山田野市線 (234 号)	香美市中心部と香南市を結ぶ幹線機能を果たしている。	都市間交通を担う路線であるとともに、香南市全体の環状道路の一角を担うことが期待される。
神母木野市線 (237 号)	香南市北部と香美市市街地東部とを結ぶ幹線である。	都市間交通幹線の役割を担う道路機能の整備が期待される。
遠崎野市線 (240 号)	吉川地区と野市地区を結ぶ部幹線機能を果たしている。	234 号土佐山田線と接続し、香南市域全体の発展に寄与した環状道路の一角を担うことが期待される。
南国野市線 (364 号)	旧国道。地域の都市形成軸、発展軸であり沿道には都市施設も多い。	今後とも香南市市街地と南国市を結ぶ重要幹線としての役割が期待される。
宮の口深淵線 (372 号)	野市町西部の集落の交通を支える道路である。	将来とも野市町西部の交通を支えることが期待される。
香北野市線 (385 号)	香南市中心部を起点とし、三宝山スカイラインとなる道路である。	今後とも観光産業活性化の役割が期待される。
高知安芸自転車道 (501 号)	太平洋沿岸部を走るサイクリングロードである。	桂浜、香我美間の未整備区間の解消が急がれる。

2 香南市道路網体系検討の方法

香南市の将来の交通体系については、以下の流れにより検討しました。

(1) 発生集中交通量の推計

①地区の設定	発生集中交通量を推計するため香南市全体を 30 地区に分ける。
②発生集中交通量の推計	地区毎に発生集中交通量を推計する。
③O（出発地） D（目的地）の設定	ゾーンごとの発生集中交通について、地域特性を考慮してゾーン番号別に出発地と目的地の想定を行い、マトリクス表（OD表）にその結果をまとめる。

(2) 道路網の設定

①道路網のネットワークの設定	現況の幹線道路網と将来道路網のネットワーク図を設定する。
②ルート別交通量の推計	ネットワークからゾーン間を結ぶルートを設定。そのルートへの配分交通量を合計し、道路網の需要交通とする。

（３）現況道路網の検討

①需要交通量配分結果	配分推計結果についての考え方を取りまとめる。
②改善道路検討	配分結果に基づき改善が必要な道路を設定する。

（４）将来道路網の検討

①需要交通量配分結果	配分推計結果についての考え方を取りまとめる。
②将来幹線道路網	現況道路網の問題の改善を考慮し幹線道路網を設定する。
③将来補助幹線道路網	将来幹線道路網に対応した補助幹線道路を設定する。
④道路網基本計画	将来幹線道路および将来補助幹線道路をもとにした、道路網計画図を取りまとめる。

３ 将来道路網の検討

（１）現況道路網による将来交通の検討結果

現況	検討結果
①交通量負荷が多い道路	国道 55 号は 1 日 30,000 台以上の交通需要があると考えられる区間があり、片側 2 車線が必要な道路と判断される。
②通過交通が多い道路	東部自動車道は 1 日 9,000 台以上の交通需要が見込まれ、市内交通が混入する状況がこのまま続けば、時間帯によっては渋滞が発生し、片側 2 車線化に向けた検討も進めなければならないと考えられる。
③市内交通需要が多い道路	市域内道路にも、1 日 9,000 台以上、場所によっては、1 日 30,000 台以上の需要が見込まれる道路があり、このままでは、片側 2 車線化を検討することが必要な時期がくる可能性もうかがえる。

（２）将来道路網の考え方

- ①国道 55 号並びに東部自動車道の本来の姿である都市間交通などの通過交通の処理を重要視して、この 2 つの路線に頼らない効果的な地区内交通処理幹線を計画し、通過交通と市域内交通の分離を図ります。
- ②市域内交通の効率性と利便性を図るため、幹線道路網のネットワークをより強化します。
- ③特に、5 町の既存市街地や今後の発展可能性のある活性化拠点地などを、機能的かつ効果的に結ぶことにより、地域活性化や発展に寄与するスムーズな交通処理の実現を目指します。

（３）市域内の環状型幹線道路

既存市街地や今後の発展が期待される地域並びに地域活性化機能の立地が期待される地域など、今後の香南市発展に重要な拠点となる地域を機能的かつ効率的に結び、環状型の都市機能軸の形成を図ります。

環状型幹線道路は、市域内の交通処理とともに、産業連携、文化連携、あるいはコミュニティ活動の連携など、各種まちづくり間の活動の連携を促す都市軸としての役割も担います。

4 幹線道路網計画

(1) 将来幹線道路網

現況道路網による将来交通の検討結果を踏まえ、将来幹線道路網図を示します。

(2) 将来幹線道路網の需要配分結果

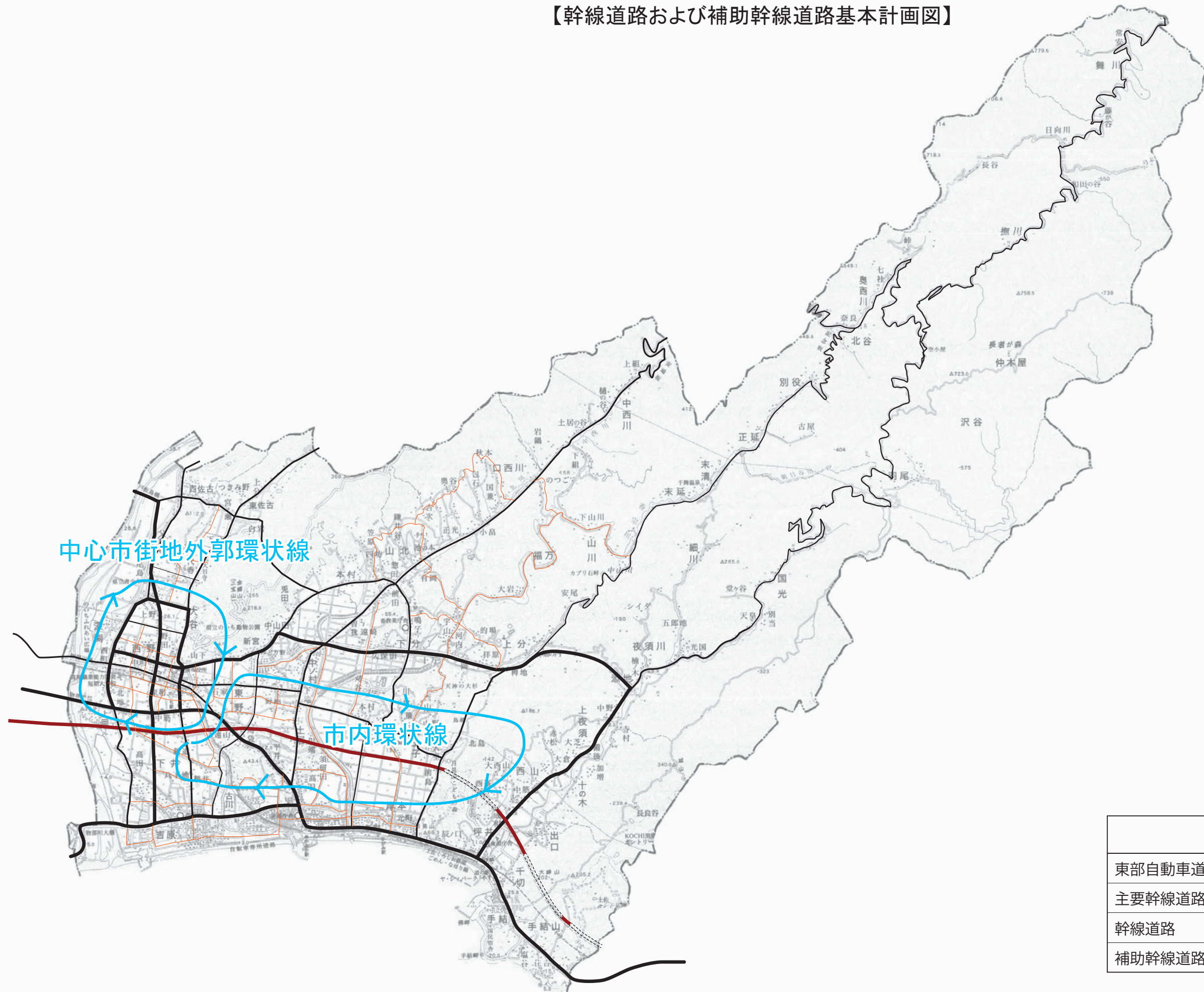
将来幹線道路網についての交通需要予測の検討を行い、その結果は次のようにまとめられます。

道路網	検討内容
①国道・県道	市内幹線道路網のネットワークが、効率的で効果的な形状になったため、国道 55 号並びに東部自動車道は主に都市間などの通過交通の配分の役割を担っていることがうかがえる。 市内幹線道路の機能を充実させることで、現在の幅員構成でも将来交通量に対応できると考えられる。
②市内環状線	市内各地域で平均して市内環状線が利用されている傾向がうかがえ、市内発生交通の効率的処理には、一定の効果があると考えられる。 また、各所で不揃いに発生していた交通需要過大傾向のルートはおおむね解消され、環状型道路への集約的な処理効果がうかがえる。
③野市町中心部の交通 量増加	香南市の人口移動状況は、30 ゾーンによってその増減の傾向が異なっている。特に、多くの地域で大幅な人口減少が予想されるなか、野市町中心部の人口は現状維持または増加すると予想されており、香南市の人口集中は、野市町中心部に大きく傾くと予想している。 そのため、野市町中心部を起点・終点とする交通量は増加することにより、野市中心部と各地区との交流交通量も大きく増加すると考えられる。郊外部から野市中心部へのアクセスをスムーズにし、かつ、広域都市間の通過交通との混在を防ぐことを考慮しつつ、野市中心部に向かうきめの細かい幹線道路網の配置を目指す。
④中心市街地外郭環状 線と域内格子状幹線道 路	野市町中心部は、野市中心部に集中する交通を処理することと、通過交通を処理するため、地区外縁部において幹線道路の交通処理能力を高めた中心市街地外郭環状線を形成することを目指す。 また、中心市街地外郭環状線内の野市都心部では、集中する交通を処理することや、地区全体で均一な土地利用が図れるよう、また、都市活動の移動や連携がスムーズに行えるよう、市街地型の土地利用に整合する幹線道路を東西、南北に格子状に配置し、交通軸の均衡を図ることを目指す。

5 道路交通網基本計画

将来幹線道路網の需要配分結果をもとに、幹線道路網を配置するとともに、交通量が多いと思われる幹線道路については、配分を補完する補助幹線道路を設定し、将来の道路網交通基本計画とし基本計画図を示します。

【幹線道路および補助幹線道路基本計画図】



凡 例		
東部自動車道	赤茶(太)	
主要幹線道路	黒(太)	
幹線道路	黒(細)	
補助幹線道路	オレンジ	

6 公共交通体系の検討

(1) 検討内容

将来幹線道路網は、5町の市街地などの主な拠点地区を結び連携する市内環状線と、環状線から郊外に結ばれる放射状道路、また、市内環状線内は利用規模に応じた密度の格子状道路により構成されることになります。

将来的なバス路線の在り方については、この道路網の特徴を活かすことを前提に検討するものとします。

(2) バスサービス

道路網基本計画の道路ネットワークの形状から、バスサービスについても、市内環状路線と、環状線を発着点とする郊外路線の組み合わせが合理的かつ効果的であると考えます。

①市内環状路線	幹線道路を市内環状線として循環させる。
②郊外路線・中心部路線	郊外および中心部の各地域へは、環状線を起終点とする往復路線を設ける。
③運営方法の検討	年間パスポートや月ぎめパスポートによる利用を広く市民や企業に呼びかけ、利用収入の向上を図るとともに、より使いやすい運行を検討する。また、交通弱者だけでなく、市民にとっても魅力あるものとするとともに、観光客にとっても便利な交通機関として利用される方向を目指す。

第4分野 観光ルート拠点形成基本計画

観光施設は、様々なメリットがあります。例えば、市民生活の憩い、家族とのふれあい、趣味や興味、など、市民生活になくてはならない活動の場を提供しています。

そのほかにも、文化交流や体験学習、また、交流人口の増加なども大きな役割を担っています。

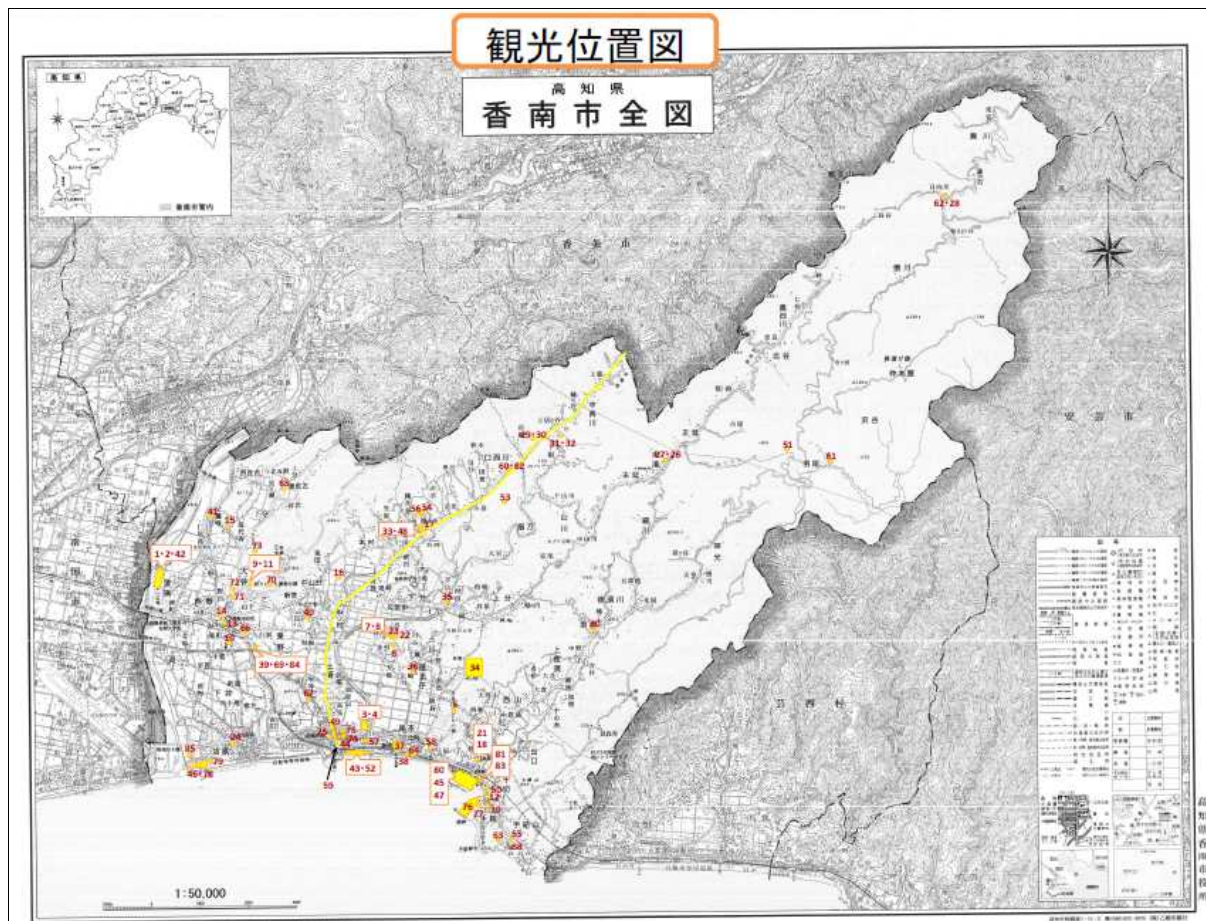
今回のまちづくりランドデザインでは、もう一つの役割である地域産業の振興という、観光産業の観点から検討を行うものとししました。

1 観光ルート拠点の現状と課題

(1) 観光資源の現況

香南市の観光資源を分類すると、以下のように分けることができます。

- ①資産活用型観光資源
- ②施設整備型観光資源
- ③体験型観光資源
- ④その他、複合型



（２）観光客増加で大きく収益増加につながる観光施設

香南市の観光施設の現状は規模の小さいものや収益に繋がる活動が弱いものが多いと判断されます。効果の高いと考えられる施設や催し物を以下に示しますが、その効果はまだまだ限られていると思われます。

地区	番号	施設や催し
岸本・徳王子地区	3	かがみ花フェスタ
西川・東川地区	7	あぐりのさと
野市中心部	13	アクトランド
野市西部地区	20	黒潮ホテル、黒潮の市
野市西部地区	22	旅館かとり
夜須南部地区	25	塩谷宿、海辺の果樹園
夜須南部地区	26	道の駅やす、やすらぎ市
赤岡・吉川地区	29	天然色市場

（※地区と番号はP49 地区別の区分を参照）

2 観光ルート拠点整備の方針

（１）役割

① 5 町の連携

香南市には合併前からの地域活性化の役割を担ってきた拠点があります。しかし、それぞれの拠点での活性化の活動は続いているものの、それぞれの特徴や利点を旨く活用した連携機能の充実はまだ十分ではありません。

香南市の活性化には、既存の拠点の連携が不可欠であり、観光ルート拠点の創生についても、旧 5 町村が連携する方向が望まれます。

② 持続可能な都市の創出

香南市に求められている活性化は、イベントなどの魅力ある集客力なども求められていますが、香南市の地場産業として定着し、都市構造として、また、産業構造として持続可能な仕組みが求められています。

そのためには、地場産業と市民活動、消費が有機的に結びついたシステムが必要であり、その役割を果たすのが、産業拠点と観光拠点が連携する新しい産業形態の観光ルート拠点です。

（２）課題

① 6 次産業の育成と飛躍

入り込み観光客の増加や活動の広範囲化による観光振興により、香南市が産業面で潤うことを目指します。そのためには、観光体験のステージである、飲食施設、宿泊施設、体験施設などの機能が必要ですが、それを実際の香南市の経済的収益に結びつけることが最も大切です。

必要なことは、香南市の資源である、農産物、土地、建物を活用した直接的な収益確保とともに、

地場産品の加工などの魅力ある商品の提供により収益を確保することや、地域の人材や資源を活用し、各種観光サービスなどを地域自らがを行い収益を上げることであり、その仕組みを育成し飛躍させることが課題となります。

②市内生産高の向上

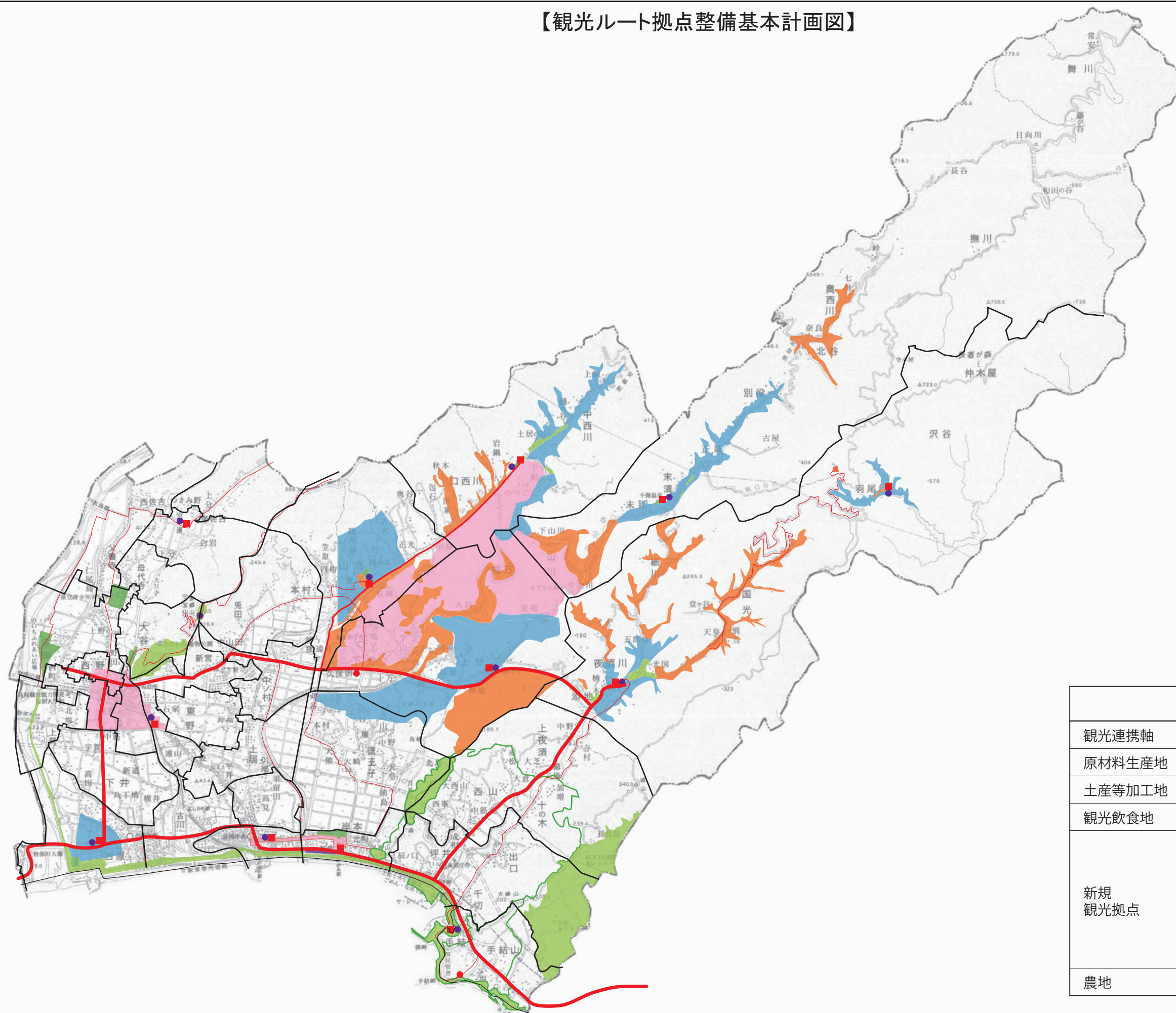
観光産業や観光活動により、地域の経済的な活性化や第1次産業をはじめとする地場産業の活性化を成し遂げるためには、採算や収益を上げる視点も必要ですが、それ以上に、地域全体で手にする生産額の向上を図ることが必要です。そのため、地域の6次産業の飛躍によって総生産を上げるなどの目標を設定することが必要となります。

（３）基本的な考え方

観光ルート拠点整備に向け、検討すべき基本的な考え方を以下のようにまとめます。

観光機能の質の向上	観光客を大幅に増加させることができる施設を育てる。
観光産業を通じた生産額の増加	観光客が増加することにより収益が伸びる、産業構造の構築を図る。

【観光ルート拠点整備基本計画図】



凡 例		
観光連携軸	赤線	
原材料生産地	青	
土産等加工地	むらさき	
観光飲食地	赤	
新規観光拠点	観光玄関口	ピンク
	宿泊施設	赤
	スポーツ体験施設	緑
	周遊コース	黄緑
	憩いの広場	ピンク
農地	オレンジ	

3 観光ルート拠点形成の考え方

(1) 観光関連消費の地場製品の生産機能の確保

観光客の土産物の購買や飲食などでの消費の対象となる地場製品について、目標する生産額と生産農地の確保をすることが必要です。

(2) 観光産業の市内総生産向上

- 地場製品販売額向上（土産物、飲食、材料などの消費拡大）

飲食品、工芸品、加工品など、市内産の材料を使った商品の消費拡大機能を育てる。

- 観光客の活動支援サービス拡大（宿泊、案内、交通などの支援の拡大）

食べる、飲む、遊ぶ、休む、泊るなどの、観光客の観光生活を支えるサービスの提供の開発整備を行う。

- 体験施設の利用増（入園、種類、魅力の拡大）

博物館やレジャー施設を含め、農業体験、里山体験、スポーツ体験、海洋レジャーなどの、目的のある観光や体験ができる施設の拡大を図る。

(3) 観光産業振興

観光産業の振興は、以下のような分野における付加価値の向上を図ることにより達成を目指します。

- ①商品消費

観光関連産業で消費される地場製品の生産を対象として考えます。

- ②土産物消費

観光客が購入する土産物にしめる地場製品を対象として考えます。

- ③飲食消費

観光客が消費する飲食関連を対象として考えます。

- ④観光サービス

観光客に提供する、交通、宿泊、案内、体験などのサービスに対する対価を対象として考えます。

- ⑤生活消費

観光客が滞在中に消費する、日常の生活消費を対象として考えます。

4 観光ルート拠点形成方向

(1) 観光連携軸の形成

旧5町村の時代から築かれた観光施設や観光活動と、新たに活性化を目指して創出する観光施設や活動を効果的に連携させ接続させるため、既存鉄道やバス路線との連携を図りつつ、香南市域に形成される環状形の道路形状を活用した、誰にもわかりやすく使いやすい、観光連携軸を創出することを目指します。

（２）原材料生産事業

観光サービスに供する地場産品を提供するために必要な農地の確保、並びに、営農や販売を行う組織の形成や人材の確保を目指します。

（３）土産物等加工

土産物等の加工については、加工場の確保とともに、材料調達や加工に携わる従業員などの確保を目指します。

（４）観光飲食事業計画

観光客の休息や昼食利用、宿泊客の利用などの需要に応じた施設の創出を図るものとし、専門店や地場産品レストランの形成を目指します。

５ 新規観光拠点

香南市の観光拠点ルート形成が効果的に機能し、香南市全体の産業振興に繋がるよう、次のような役割を果たす機能の形成を図ります。

①観光玄関口の創出	観光コース企画、観光受付窓口や各種割引サービスの提供と各種案内や相談とともに、お土産、飲食、体験、休息などのサービスの提供
②宿泊施設の提供	農家宿泊（Ｂ＆Ｂ）や空き家（古民家）宿泊など
③スポーツ体験施設の提供	ゴルフ練習場やミニコース、球技場、シュノーケリングやダイビングや釣り、ミニコンサートホールなど
④周遊コースの設置	サイクリングロード、ジョギング・マラソンコース、ハイキング・散策コースなど
⑤憩いの広場の創出	季節の植物園、貸し農園、貸し牧場、貸し養殖場など

第4章 土地利用基本計画

1 沿岸地域のまちづくり

(1) 地震津波への課題と方針

古くから主要な高知県の東西交通を支える主要な沿岸部は、農村集落だけではなく、都市型住宅地や商業業務施設、さらには、教育、医療、福祉施設なども集積し、これまでの香南市の発展を支えてきました。

しかし、近年は、地方都市における産業衰退傾向や少子高齢化による人口減少傾向などにより、都市活動の活力に陰りが見えてきています。

特に、将来確実に起こるとされている南海トラフ巨大地震による地震の揺れと津波により、甚大な被害が発生する予想されていることから、地区外への転居者の増加と地区内への転居者の減少などにより、地域経済の停滞に拍車がかかってきており、大きな問題となっています。

これまで香南市の発展をささえてきた沿岸部の地域が、これからも元気で活力ある市街地として存続し続けることが、香南市の全体の持続可能な活力を支えることに繋がり、沿岸地域の地震津波対策と地域活性化を実現することが大きな課題といえます。

①地震津波対策の基本方針

沿岸地域が安全なまちとなるための、根本的な地震津波対策は次のように考えます。

- 地震で倒れない堅ろうな住宅に住むこと。
- 津波に襲われない、高台に居住すること。
- 高度な体制が整った避難施設や支援体制が確保できていること。

②まちづくりの方針

活力あるまちの再生を目指し、以下のような将来方向を検討します。

- 津波がこない安全な高台に、優良な宅地を建設し、高台移転用地を提供する。
- 海岸部から移転を希望する住民のために、高台移転を支援する。
- 沿岸部では商業業務製造などの既存産業の活性化を図るとともに、移転跡地などを利用したレジャーレクリエーションなどの新しい魅了ある活性化機能の創出を図る。
- 高台部では、住宅や教育、医療、福祉、介護などの公益施設の高台移転用地を確保し、沿岸部と連携のとれた都市活動と、沿岸部と一体となった活力ある市街地の形成を図る。

③地域の暮らし方の方針

持続可能で住みやすい働きやすいまちをつくるため、次のように考えます。

- 津波被害が予想される地区では、災害防止対策のための公共用地を確保するとともに、住宅は、山側地区の高台に換地として移転させる。
- 海岸部には、商業業務施設や観光施設など、昼間に利用する施設を主とし、まちの活性化

のための施設を配置し、多くの人が働ける場所とする。

- 家族と暮らし、体を休める生活機能は山側に配置する。
- 宅地の移転により確保できる用地を活用し、津波防止施設を設ける。

④津波に安全な建物について

- 津波や地震に襲われても倒壊しない堅ろうな建物で、かつ、津波がきても浸水しない高さに居住することができれば、高台移転と同じ効果が得られる。
- 津波や地震に強い高層建築を、自前で建設することは難しいが、複数の地権者が集まり、共同で建物を建設することで、それが可能となる。
- すなわち、複数の地権者が協働で用地を確保し、共同で耐震性が高く、津波に負けない高層建築を建設する方法となる。

(2) 事業手法の検討

移転方法を検討すると、下表のとおり4種類に整理することができます。

①区画整理事業	①従前（現在）の宅地と同等の評価の土地が換地される。（取得する） ②建物は、移転補償費をうけとり、自分で建てなおす。 （移転補償費は、建物補償、動産補償、その他補償の合計） 動産補償とは、建物や敷地に付属している設備や立木の移転補償 その他補償は、休業（商売含む）、手続き、引越しなどの諸費用 ③問題点や課題 ●土地の評価は、事業前より事業後が高くなる。したがって、事業後の土地の面積は小さくなるのが一般的。 ●建物補償は残存評価額（建築年数により評価が落ちる方法）になる。新築での評価ではない。 ●移転先（換地）は、区画整理地区内の宅地に限る。地権者の方から地区内のこの場所に移転したいと申し出て頂く。 ●土地区画整理事業は収支が伴う事業。収入には、補助金、負担金、保留地処分金などがあり、事業が成立するかどうか、十分な研究が必要。 ●区画整理事業は、地区内関係者の合意が必要。
②防災集団移転	一定の住宅がまとまって、高台に整備した宅地に移転することに対し、公共が補助をする事業。 ①現況の宅地と建物は、公共が買収。 ②引越し費用（の一部）は補助金が出される。 ③高台では、公共が用意した宅地を借りる。 （土地を買収する場合は、自己負担） ④土地建物売却取得金で、自分で建物を建築。 ⑤住宅建設借入金に対する利子は、公共が補助。

	⑥問題点や課題 ●一定規模（現在は10戸以上）のまとまりがある地区を対象。 ●災害危険区域（建築制限あり）や移転促進区域（住宅利用禁止）に指定する必要がある。
③集約換地と高層ビル	区画整理地区内で希望する地権者が集まって、高層ビル建設が可能な敷地を共同で確保することができる。 また、建物などの移転補償費を使って、共同で高層ビルを建てることもできる。この手法を使って、地震に強い、津波浸水予想高より高い居住空間を確保する事業。 ①土地区画整理事業で、換地の申出を行い、自分の土地を集約換地。 ②現在の建物は評価に応じて、新しい高層ビルの「権利床」＝部屋として受け取る。 ③高層ビルの床を売却することにより、高層ビル建築費に当てることができるので、より大きなビルを建設することもできる。 ④問題点や課題 ●共同住宅になるので、管理も共同で行う必要がある。（管理組合） ●老朽化に対応する取り決め（再建築、解体など）をしておくことも必要。 ●保留床を売る場合、第三者に売却するか、自分たちで購入し運用するか、いずれにしても「リスク」＝「売れない、借り手がない」に対処する方法を事前にしっかり検討することが必要。
④個人で移転	個人の住宅などについて自分で移転される場合には、現段階では防災集団移転事業などの対象とならず、個人の事業であるとされる。 問題点や課題 ●要配慮施設などについては、行政サイドが出来る部分もあると考えられるので、今後の検討課題。 ●その他の個人の移転についても実態に合った支援策の検討が必要。

（３）地震津波への対策の検討

①避難施設の建設用地確保

災害時の避難施設用地とするため、公園などの公共用地を確保することが大切です。また、災害時の避難路を確保するとともに、火災や事故に対応する防災用地も確保することを考える必要があります。ソーラー発電など、自家発電設備を用意したり、水源を確保したりすることも必要になります。

②仮設住宅建設能力確保

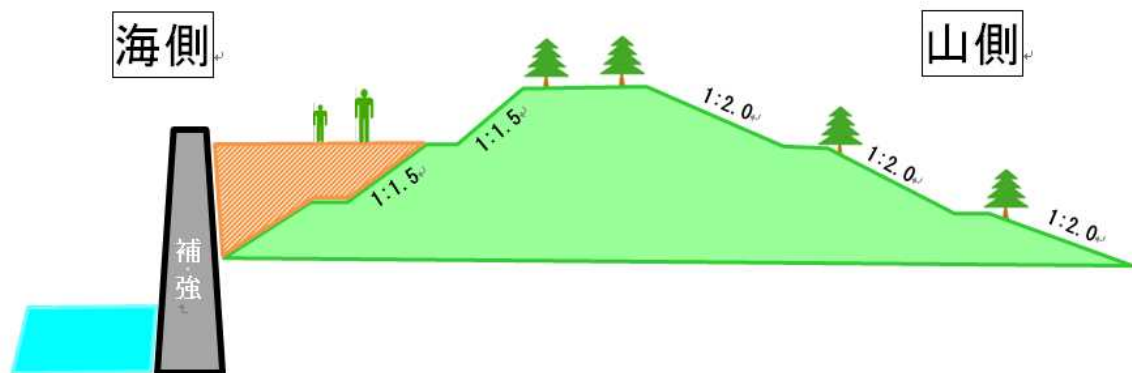
権利者の移転住宅を建設するノウハウなどを生かし、地元木材を活用した仮設住宅の建設を準備しておくことも考えます。

③津波防止堤防の建設

- 十分な幅を持つ帯状の防災用地を、海岸線に沿って確保することもできます。
- 山側の区画整理事業で発生する残土を集め、十分な高さを備えた堤防公園を建設することも考えられます。
- これが連続すれば、相当に津波の浸食を防ぐことが可能になると考えられます。

④既存防波堤の強化

- 既存の防波堤を揺れで崩れないよう補強し、津波の被害を抑えることも必要と考えます。



津波防止堤防イメージ

2 市街地ゾーンのまちづくり

(1) 市街地ゾーンの問題点と課題

香南市の宅地開発を主に受け持ってきた市街地ゾーンでは、土地利用の状況からみて以下のような問題点や課題があります。

①優良な宅地の提供	今後も安定した人口を維持するため、優良な宅地を提供する必要がある。また、産業構造や人口構造の変化などにより発生する空き家、空き店舗などの利活用を図る必要がある。
②農業環境との調和	市街化が進捗するとともに農業施設や営農環境に影響が出てきており、宅地の基盤整備を進めるとともに、農道や農業用排水の維持管理や再整備を行い、農地の保全を図る必要がある。
③農地と宅地の混在解消	既に宅地と農地が混在している地区があり、より良い営農環境や居住環境を確保するための施策を実行する必要がある。
④都市型産業の振興	市街地での人口増加や年齢別人口構成の変化に対応した、より魅力があり活気のある商業業務を中心とした都市型の産業を育成する地域の創出も課題である。

(2) 市街地のまちづくりの方向

①魅力ある定住地の提供

香南市はこれまで、山・川・海の恵まれた自然環境や、鉄道、バス、道路、空港などの交通の利便性から、多くの移住者が集まり安定した増加傾向の人口規模を保ってきました。また、教育施設や文化施設などの公益施設が整っており、観光施設やレジャーレクリエーション施設が充実していること、さらに、魅力ある商業施設が集積していることから、住みやすく暮らしやすいまちとして多くの市民が定住を続けてきています。

今後とも、転入による新たな市民の増加や、定住促進により、多くの市民が長く住み続けてもらう街を目指し、希望に合った低廉な住宅地の供給をもとに、暮らしやすい魅力ある市街地の形成を図ることを目指します。

また、空き店舗や空き家については、居住希望者や移住のニーズ、さらには、商業等のチャレンジのニーズに答えるなどにより、新たな転入者などを受け入れるなど再活用しやすい仕組みや再整備の手法を検討し、再利用の実現を図ります。

②宅地と農地

住宅地でありながら豊かな田園に囲まれた市街地は、これまで美しい水と緑の環境を享受することができていました。また、農村集落地域で醸成されたコミュニティ財産である神社仏閣や公園広場などの豊かな緑の空間があり、市民の魅力ある憩いの場が提供されてきました。

しかし、近年の急速な宅地開発の進展により、地域コミュニティの弱体化による施設の維持管理が難しくなりつつあることや、農業用排水路や農道などの農業用施設が、生活排水や生活道路などの都市基盤施設として利用されるようになるなど、農業環境、居住環境にも問題が生じてきました。

今後とも良好な居住環境と農業環境を維持するためには、住宅地と農地が調和と共生のとれた環

境を創り上げることが必要であり、既存の農地を守るとともに、混在を解消し、新たな魅力ある居住地や地域コミュニティの創出を図るための、土地改良事業や基盤整備事業とともに、農地と宅地との調和と共生を実現する面的整備事業の導入も目指すものとします。

③水と緑

市街地の農業環境整備により享受してきた水と緑の居住環境も、農地と宅地の混在による環境悪化や、農業用施設の荒廃や老朽化などに問題が生じつつあります。

今後は、農業事業に頼るだけでなく、都市機能や住宅機能としての基盤整備を進めることが必要になってくる。特に、上水道整備や雨水や汚水の排水施設整備、また、道路や公園などの公共空間施設整備などを計画的に進めることとします。

④交通網

人口集積地であり商業業務などの都市機能の集積地である市街地は、生活・産業・交流の需要交通がますます増加する傾向にあります。

今後は、需要交通に見合った構造とネットワークを有した交通網を整備するとともに、香南市の中心市街地にふさわしい、発展、交流、活性化の主軸となる機能を有する交流軸の形成も図ります。

(3) 土地利用

市街地ゾーンについては、以下のように土地利用を図ります。

居住地区 (黄)	①都市型住宅地の整備 今後とも良好な住宅環境の整備・改善・保全を図る。 ②コミュニティ施設の充実 居住環境にふさわしい地域のニーズにあった公益施設整備を進める。 ③生活基盤整備の促進 雨水排水施設や生活道路や公園などの整備を図る。 ④空き家の再活用 賃貸住宅、移住対応住宅などの移住促進事業として利活用を進める。
商業地区 (茶枠)	①商店街の再生 既存の商業施設や空き店舗空き地を活用し、チャレンジショップや手軽な宿泊施設として利活用を図り、地元商店街の再生を進める。 ②中心商業地区の形成 大規模商業施設地集客力のある大規模商業施設の誘致を図る。 ③新産業地の創出 6次産業をキーワードとした新たな産業機能の立地を図る。 ④近隣小規模商業の再生 便利で親しみのある小規模な近隣商業施設の活性化を図る。
防災緑地地区 (緑) ㊦公園(黄緑)	①地震津波の被害を最小限にとどめる。緑豊かで散策機能を持つ防波堤の整備を進める。 ②自然災害に強い道路、水路、緑地、公園を整備する。 ③地域住民の生活スタイルにあった公園・緑地やレクリエーション施設の整

	備を進める。
農地保全整備地区 (オレンジ)	今後とも優良な農地として保全する。なお、将来において香南市の農業環境や市街地環境に大きな構造改革が必要となり、農用地の土地利用転換が必要となる場合には、市街地ゾーン以外の農用地を守る視点から、計画的な土地利用転換の候補地と考える。
農地再編地区 (紫)	現在でも市街化のニーズが強く、今後の農地と宅地の混在化が懸念される地区については、農業環境と市街地環境を明確に区分するため、宅地開発との調和を図りつつ農地保全を目的とした農地の再編を検討する。
農地市街地混在再編地区 (桃)	現在でも既に農地と宅地の混在化が進み、また、市街化への需要も高い地区については、面的整備事業により農地と宅地の再編をおこない、優良な農地の再整備による保全とともに、一定規模の宅地化に対応する市街地整備事業の推進を検討する。

3 自然環境山林ゾーンのまちづくり

香南市の自然環境や居住環境の源となる資源である自然環境・山林ゾーンは、市民の生活スタイルの変化や産業構造の変化に対応し、維持管理や環境の持続などを目指すものとし、土地利用を図ります。

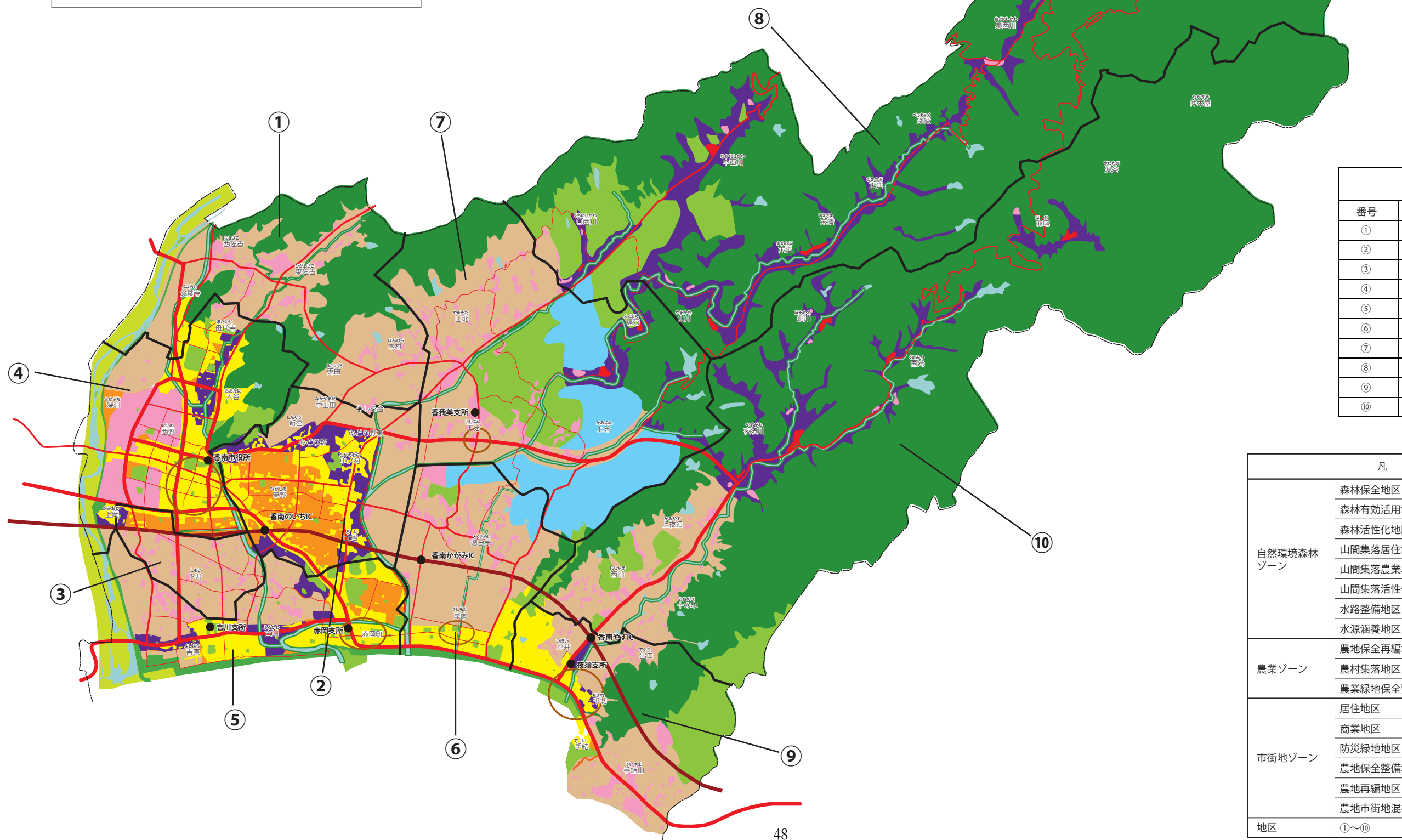
森林保全地区 (緑)	森林や所有者に頼ってきた環境保全については、様々な分野からの参画や利用を実現し、香南市、市民を上げての涵養、保全、管理活動を進め、保全を図る。
森林有効活用地区 (青)	森林の資源や資産を活用することにより、香南市の6次産業の振興や就業の場の確保および新しい産業機能の創出等を検討する。
森林活性化地区 (黄緑)	美しい水と緑の環境を守り活用するためには、地域で生き生きと暮らすことができる集落の活性化は不可欠であり生涯活躍のまち(CCRC)の検討や、時代のニーズにあった居住、就労、観光、福祉の機能の再生を図る。
山間集落居住地区 (桃)	香南市の農林漁業の地場産業を支え続ける仕組みづくりとともに、時代のニーズに合った快適な居住環境や共益施設機能を整備し、定住を促進する。空き家の再活用を図る。
山間集落農業地区 (紫)	山間集落地の主要な産業地として、また、生きがいの場として、保全を図る。
山間集落活性化地区 (赤)	観光や体験、6次産業を支える生産地としての活用促進を図り、地域の活性化拠点農地の形成を図る。
水路整備地区 (緑)	自然災害に強い用排水施設や雨水排水施設を構築し、地域の安全性を高めるとともに、人と自然のふれあいの場としての活用を図る。
水源涵養地区 (水色)	香南市域全体の雨水排水システムのなかで、地下水涵養の役割を担う雨水浸透エリアとして、水と緑の水源涵養機能を形成する。自然地形や植生や動植物の生態系を尊重し、自然工法やビオトープ的な土地利用を図り、人と自然との共生の空間の創出を目指す。

4 農業ゾーンのまちづくり

元気で活力があり持続可能な香南市を再生するためには、基幹産業である農業の再生が必要です。そのためには、時代にあった営農環境を創生するとともに、新たな営農組織にふさわしい農地の再生が必要となっており、次のような土地利用を図ります。

農地保全再編地区 (茶)	時代にあった担い手や営農手法に対応した、収益性の確保が可能な農業基盤の再生を目指す。
農村集落地区 (桃)	地域に暮らし地域で営農を続けるためには、時代のニーズに対応した集落の環境を再生することが必要です。居住環境の改善や公共サービス充実とともに、地域住民の憩いの場や観光産業などの形成などを目指す。 また、市民生活に不可欠な買い物、交通、教育、医療の利便性を高めるとともに、子育て環境や高齢者の憩いの機能を充実させ、沿岸地域からの高台移転も考慮した、暮らしやすい地域の再生を目指す。
農業緑地保全整備地区 (緑)	自然災害や地震津波災害の減災を目指し、水路や防災調整地のほか避難タワーや避難場所、あるいは津波防波堤などの防災施設の整備を推進する。

【土地利用計画図】



凡 例	
番号	地区
①	野市北部地区
②	野市東部地区
③	野市南部地区
④	野市中心部 (市街地地区)
⑤	赤岡・吉川地区
⑥	岸本・徳王子地区
⑦	山北・山南地区
⑧	西川・東川地区
⑨	夜須南部地区
⑩	夜須北部地区

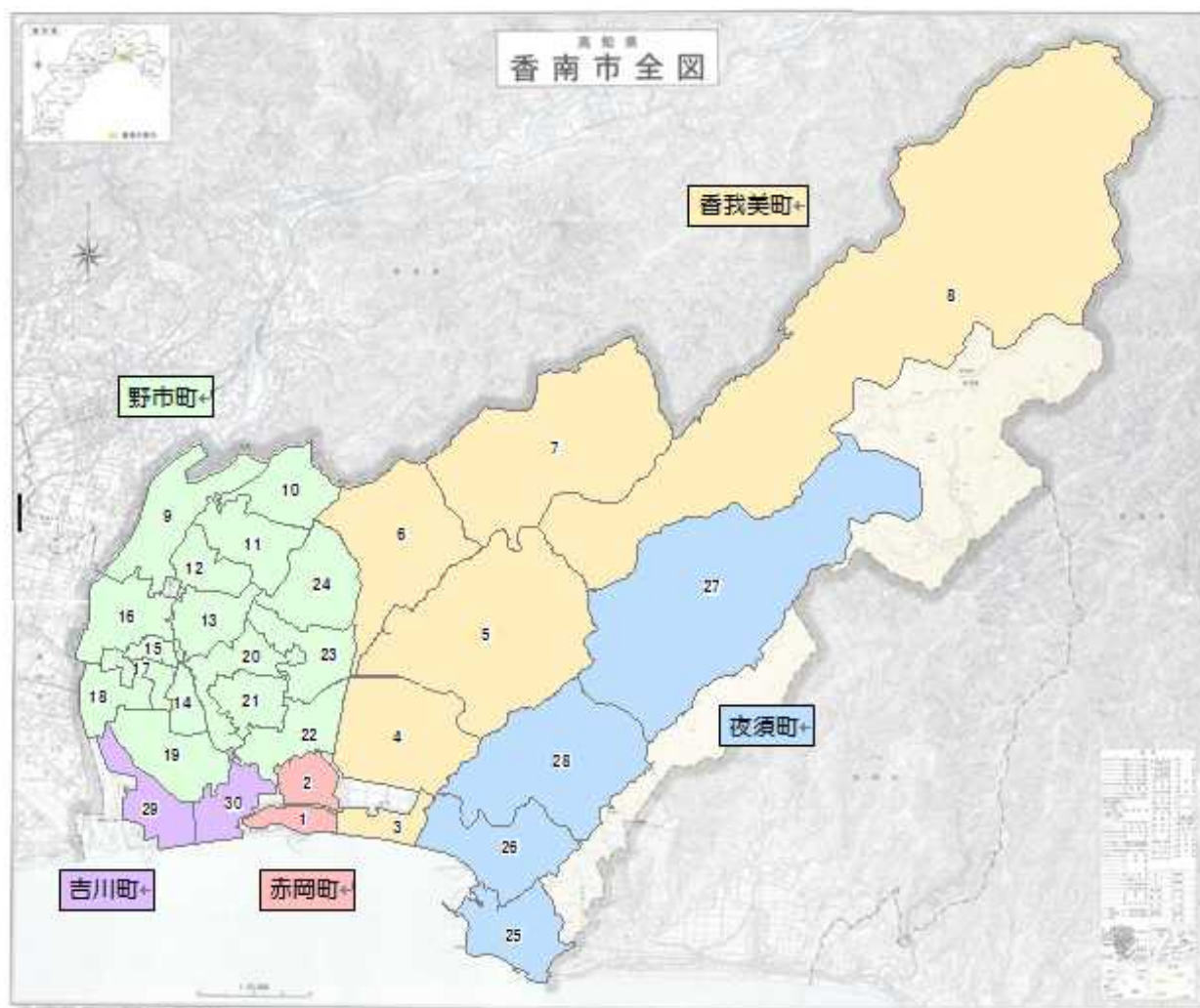
凡 例			
自然環境森林ゾーン	森林保全地区	緑	
	森林有効活用地区	青	
	森林活性化地区	黄緑	
	山間集落居住地区	桃	
	山間集落農業地区	紫	
	山間集落活性化地区	赤	
	水路整備地区	緑	
	水源涵養地区	水色	
農業ゾーン	農地保全再編地区	茶	
	農村集落地区	桃	
	農業緑地保全整備地区	緑	
市街地ゾーン	居住地区	黄	
	商業地区	茶枠	
	防災緑地地区 (公園：黄緑)	緑	
	農地保全整備地区	オレンジ	
	農地再編地区	紫	
	農地市街地混在再編地区	桃	
地区	①～⑩	黒線	

5. 地区別土地利用計画

(1) 地区別の区分

地区別土地利用計画を取りまとめます。地区別の区分は以下に示すとおりです。

地区	番号
①野市北部地区	9、10、11、24
②野市東部地区	20、21、22、23
③野市南部地区	19
④野市中心部（市街地地区）	12、13、14、15、16、17、18
⑤赤岡・吉川地区	1、2、29、30
⑥岸本・徳王子地区	3、4
⑦山北・山南地区	5、6
⑧西川・東川地区	7、8
⑨夜須南部地区	25、26
⑩夜須北部地区	27、28



(2) 地区別土地利用計画

地区	番号	自治会	基本方針	分野別基本計画	主な土地利用
①野市北部	9 10 11 24	西佐古、父養寺・仁尾島 上分 下分、つきみ野、宮の瀬、白岩団地 兔田、本村	水と緑の自然を守り、活力ある農業農村地区の形成を図る。	・水と緑の保全と活用 ・用排水路の整備促進 ・幹線道路の保全と整備促進 ・地域観光拠点の創出	・森林保全地区（緑） ・農地保全再編地区（茶） ・農村集落地区（桃） ・水源涵養地区（水色）
②野市東部	20 21 22 23	山下、西石屋、遠山・山地・馬袋南、新宮、みどり野、 東石屋、野地・野地西・東の東・東の北、 御無所・波江・馬袋北、野地東の中・東の西・東 平井、土居 中ノ村、中山田	国道沿道の市街地の活性化を図るとともに、住宅地と農村周宅と農地とが共存する活力ある地域を育てる。	・公園や公益施設の緑地整備と保全 ・住宅地の排水施設の整備促進と農業用排水の整備促進 ・環状型幹線道路整備促進と幹線道路充実 ・沿道型観光商業施設の醸成	・居住地区（黄） ・農地保全整備地区（オレンジ） ・農地再編地区（紫） ・防災緑地地区（公園等）（黄緑） ・農地保全再編地区（茶）
③野市南部	19	高田、宇賀、八丁地・下井団地・横井・新道	東部自動車道の整備推進とともに、優良な農地の保全を図る。	・農業環境の保全 ・環境や優れた安全な水路の整備促進 ・東部自動車道関連の道路整備促進 ・体験学習型の観光農地などの提供	・農地保全再編地区（茶） ・農村集落地区（桃） ・農地保全整備地区（オレンジ）
④野市中心部	12 13 14 15 16 17 18	母代寺 大谷 東町・東中筋 切石、中組、西町北 野田、東上野・中・西・西上野、深淵・北・南、西町北 中町、大國町・武市橋・中中筋、西町東・中・西 西中筋、北地、上岡	魅力ある都市機能を備え、香南市の活力ある中心市街地の形成を図り、市域の活性化の牽引を図る。	・公園や公益施設の緑地整備と保全 ・市街地の排水施設の整備促進と農業用排水の整備促進 ・都心部にふさわしい、都市間交通幹線、環状型幹線、格子状幹線などの整備の促進 ・既存の商業業務機能の集積を活用した、魅力ある都市観地区の形成	・森林保全地区（緑） ・防災緑地地区（公園等）（黄緑） ・居住地区（黄） ・商業地区（茶枠） ・農地再編地区（紫） ・農都市街地混在再編地区（桃） ・農地保全整備地区（オレンジ）
⑤赤岡・吉川	1 2 29 30	江見、本町・弥生、弁天・横町、塩かぜ、幸、曙・松ヶ瀬 一本松・高見・横町4区、赤岡北部、別所山 錦、清水・八反、浜口、西北、西南、 中組、東組、古川、瀬戸	津波地震への防災対策を行い、優良な農地や集落を守るとともに、空港近接や交通利便性を活かした沿岸地域のまちづくりによる、元気なまちへと再活性化を目指す。	・公園や公益施設の緑地整備と保全 ・市街地の排水や農地農業用排水の整備促進 ・幹線道路、補助幹線道路の整備促進 ・既存の商業業務機能の集積を活用した、魅力ある観光産業センターの形成	・農地保全再編地区（茶） ・居住地区（黄） ・商業地区（茶枠） ・防災緑地地区（公園）（黄緑） ・防災緑地地区（緑）
⑥岸本・徳王子	3 4	新町、本町、宇田、元町、月見山、磯の鼻 本村、ハビネス、中野、徳善、すだれ	津波地震への防災対策を行い、優良な農地や集落を守るとともに、幹線道路沿道条件や大規模用地立地の利点を活かし沿岸地域のまちづくりにより、元気なまちへと再活性化を目指す。	・公園や公益施設の緑地整備と保全 ・市街地の排水や農地農業用排水の整備促進 ・幹線道路、補助幹線道路の活用 ・既存の施設と未利用地を活かし、交流、物販、体験、宿泊、滞在などによる観光商業の活性化	・農地保全再編地区（茶） ・居住地区（黄色） ・商業地区（茶枠） ・防災緑地地区（公園）（黄緑） ・防災緑地地区（緑）
⑦山北・山南	5 6	久保田、宇山・鳴子、コスモス、上分西、上分東、ルネサス、自衛隊 山北1～5、	津波に安全な高台用地を活用し、高台移転受け皿になるとともに、将来の香南市の活性化をリードする産業クラスターの立地促進を目指す。	・高台の魅力を活かし、自然環境との共生・調和のとれた、各種の活性化用地の確保 ・市街地の排水や農地農業用排水の整備促進 ・環状型幹線道路整備促進と幹線道路充実 ・スポーツ・レジャー施設の提供や、地域観光拠点の創出	・森林保全地区（緑） ・森林有効活用地区（青） ・森林活性化地区（黄緑） ・農地保全再編地区（茶） ・農村集落地区（桃色）
⑧西川・東川	7 8	口西川、中西川 東川、奈良、舞川	美しい自然を活かし、活力ある中山間集落地の保全を図るとともに、広域観光拠点の形成を目指す。	・美しい自然を守る水と緑の保全と活用 ・用排水路の整備と水源涵養機能の醸成 ・都市間交通幹線の整備促進 ・地域の資源を活かした地域観光拠点の形成	・森林保全地区（緑） ・森林活性化地区（黄緑） ・山間集落農業地区（紫） ・山間集落活性化地区（赤） ・水源涵養地区（水色）
⑨夜須南部	25 26	手結山、手結 出口・千切・駅前、夜須4・5・6・7地区	風光明媚な恵まれた環境を活かした居住地の形成と、幹線道路沿道環境や、臨海リゾート機能を活用した、観光拠点のさらなる発展を目指す。	・山・川・海の水と緑のネットワークの海浜拠点の形成 ・河川、水路、農業用排水路の整備促進 ・環状型幹線道路の整備促進 ・ヤ・シィパーク海浜観光と、山・川・海の連携を活かした地域観光拠点の形成	・森林保全地区（緑） ・農村集落地区（桃） ・農地保全再編地区（茶） ・居住地区（黄色） ・防災緑地地区（緑）
⑩夜須北部	27 28	夜須北部（添地・夜須川・国光・細川・羽尾） 夜須8地区（十の木・上夜須）、西山・西十の木・旭・大西山	美しい自然を活かし、活力ある中山間集落地の保全を図るとともに、特徴ある地域観光核の形成を図る。	・美しい自然を守る水と緑の保全と活用 ・用排水路の整備と水源涵養機能の醸成 ・都市間交通幹線の整備促進 ・地域の資源を活かした地域観光拠点の形成	・森林保全地区（緑） ・森林活性化地区（黄緑） ・山間集落農業地区（紫） ・山間集落活性化地区（赤） ・水源涵養地区（水色） ・農地保全再編地区（茶）

第5章 実現に向けた検討事項

香南市まちづくりグランドデザインの検討結果から、「香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の今後 2060 年を目指す 4 つの分野のメニューを整理し、総合戦略での検討事項を以下のように取りまとめます。

魅力あふれる産業を振興し、安定した雇用を創出する

- ①足腰を強め、「地力」を高める
 - 共同運営型の農業経営組織の実現
 - 林業＝森林＝「保全地区」＋「活用地区」＋「活性化地区」
- ②新たな産業づくりに挑戦する
 - 6次産業拠点創出
- ③分野を超えた産業間の連携を強化する
 - 観光ルート拠点整備
 - 観光連携軸形成と観光客への公共交通サービス提供

新しい人の流れをつくる

- ①移住・定住促進のためのしくみづくり
 - 多世代交流型定住促進のための住宅地
 - 高台移転住宅地開発
 - 新市民誘致型の分譲住宅地開発
 - 生涯活躍のまち(CCRC)による転入促進

若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる

- ①人生をトータルでサポートする体制づくり
 - 各世代のライフスタイルに応じた住宅地創出
 - 家族構成変化に応じ機能向上できる住宅地
- ②こども・子育て支援・環境の充実支援
 - こども子育て家庭にふさわしい住宅地

時代に合った地域をつくり、地域の連携に寄り安心な暮らしをまもる

- ①協働のまちづくり推進
 - 集落活動センターの設立
- ②災害に強いまちづくり
 - 高台移転
 - 津波防波堤の築造
 - 雨水排水施設の整備
- ③交流人口拡大
 - 交流拠点整備と運営（市民と CCRC 住民）
- ④大学との連携
 - まちづくり推進経営組織の運営